
ファンタージェン ～鎮魂の歌姫～

白亜迺舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーエン 〈鎮魂の歌姫〉

【Nコード】

N7527F

【作者名】

白亜迺舞

【あらすじ】

女王モンデンキントの御代が始まったばかりの頃。声、視力、そして父親をエルフェンバイン塔の戦いで亡くした少女バラッドは、少年オペレッタと共に父の死場所へと向かう。悲しむことを見失い、心に空虚を抱いた少女は、何のために、誰のために歌うのか？二十世紀最大のファンタジー作家エンデの大作『はてしない物語』を元にした、悲しみの滲む切ない物語。

prologue (前書き)

一応、原作の読了を推奨します。

prologue

そのクサビトの少年は旅立ちの矢先に歌を聞いた。

青い空の美しい日だった。雲は無く、風は軽やかだった。

響く声は少女のもの。晴れ渡るソプラノで、はてしないファンタジーの空と地平に向かってどこまでも響いている。歌詞はないが、それが言いようのない喜びと幸いを表現しているようで、立ち止まらずにはいられない。

「いつもきれいな歌だね」

馬から降りて少年が声かけると、少女は歌を止め、頬笑みかけた。

「ありがとう。——見ていたわよ」

緑の肌の少年と根本的に風貌の違う、茶色い肌の少女が言う。

「あなたって誰にも何にも言わずに出立しようとするのね。家族がいなくても、お世話になった人とか友達とかに言うことがあるんじゃないの?」

言われて少年は、あー、と苦笑した。

「僕たち草人はあまりそういうことしないんだ。——狩りでいつ死ぬか分からないからね。いちいちお別れ言っているときりがないし、しめっばい」

「——そう」

少女は草むらの上をふわりと歩み、少年の手を取った。彼女は、少年と違いクサビトではなく、ハラビトという種族。草人の女が持ちえない柔らかい手を、少年は心地よいと感じる。

「なら、幼馴染の私にも何も言わないの？」

「あ、いや……行ってくるよ。全部終わったら必ず帰ってくる。そうしたら、旅の話をしてあげる」

「――約束、してね。帰ってきたら、話したいことがあるから」

少年はそろそろ焦れ始めていた。――引き止められることに。

しかし少女はまだ少年から離れない。彼の胸にかかっている金のメダルを引き出し、裏表を眺めた。

「汝が 欲する ことを なせ」

「このアウリンに書かれているのかい？　――僕には関係のないことだ」

「そうね。――行っってらっしゃい」

少女がメダルを放し後ろに下がると、少年は別れの意味を込めて、再び彼女の手を取り力を込めて握った。

そしてひらりと馬に乗り、少年は風の如く走り去った。――その胸に一切の未練なく、ただこれから広がる大いなる探索の旅路への希望と、卑小な不安を抱いた。

少女はその背中を、気遣わしげに見送る。――きっと帰還してほしいと願う。

二人の約束がこの場所で果たされることはなかった。

時代は危機の刻。女王“幼ごろの君”は病に伏せり、ファンタ
ージエンは虚無に飲み込まれる脅威にさらされていた。女王からの
命とアウリンを授かり、大いなる探索に出るのはクサビトのアトレ
ーユ。しかし彼はアウリンの本当の力を知らない。その裏に刻まれ
た言葉も、教えられたにも関わらず忘れ去った。

だが、ここに一人の少女がそれを心に刻んでいた。

やがてその少女は旅に出る。奇しくも、アウリンの言葉を心の支
えとして。

ここに少女バラッドの物語りをしよう。

Story, in the Place of the Qui
et, of The two.

s | 1 (前書き)

故ミヒヤエル・エンデ氏に敬意を示す

「ここは物語と吟唱の都アマルガント。ここには救い子バスチアン・バルタザール・ブックスの全著書が収められた図書館があり、誰も聞いたこともない様々な物語が町を満たしている。さあ、ようこそ来訪者よ。あなたもアマルガント人の優れた語り手の物語りに耳を傾け、その心を満たすがよい！」

かつて銀の都として名を馳せ、しかしあることを契機に、銀を失ったものの幾千の物語を得て再興した都、アマルガント。この都の門をくぐる者は決まってこのような文句で歓迎されるだろう。

ファンタージエン人にとって、物語るということは何よりも尊いことであり、また聞くことは何にも勝る娯楽ということとは、ご存知のことかと思う。そして物語りということ、今やファンタージエンにこの都の右に出るところはない。自然、この都は各地から集まる人や物によって繁栄することとなった。

門をくぐれば、鮮やかな光沢を放つ煉瓦の道と街並みが広がっている。基調となる色は、銀を思わせる青。温暖な気候の空の下、まばゆい光に煌めく街路を多くのファンタージエン人が歩いている。

ひとつ、街の中を見てみよう。

まず大通りがある。これは街を一直線に貫くまっすぐな道。途中から水路がわきを流れ始め、とても涼やかだ。諸所に巨大な街路樹があり、さわやかな木陰を作りだしている。その下には銀髪のアマルガント人の語り手や歌い手がおり、おとずれた者達を集めて物語りや歌を聞かせている。

大通りを外れて少し細い道に入ると、そんな各地から集められた品物や食品を売る露店が並んでいる。物語りを聞かせる大通りとは違う賑わいがこのマーケットにはあり、来訪者たちを楽しませる。

さらに道を進むと、少し日陰で暗くなった所に物語りや歌とは違

う、また別の見世物で人を集める場所がある。手品や大道芸、占いや演奏の類である。物語りにも買物にも少し息抜きを入れたい来訪者は、こういった他愛無いところで足を止める。

このような場所には大抵小さな集まりしかないのが普通である。だが、例外はある。街の一層薄暗い路地に、少ないとは言いがたい数の人々が列をつくるものがあつた。

ある路地裏に、少女がいた。

白い髪、白い肌。眉毛も白く、唇にも色がない。二足二手の華奢な身体に白灰の長衣を纏っているのが唯一の色彩。

眠たげに開かれた瞼の間にあるもの、ふつう眼球と呼ばれるその器官は、白眼も黒眼も区別なく黒曜石のような漆黒に染まっていた。その眼は異様な雰囲気を醸し出しており、彼女を神秘的な存在へと飾り立てていた。

モノトーンの少女。名をバラッドという。

その風貌だけで十分人の注意を引くに足りたが、彼女は街の暗がり、に机と椅子を構え、占いをしていた。

これがよく当たる。バラッドがアマルガントを訪れたのはほんの一月前ほどだが、瞬く間に評判は広がり多くの人々が集まるようになった。

「バラッドさん、私は商人です。ここには休暇を作ってきましたが、急に店の経営に変化が生じたので早急に対応をしなければなりません。ですからどうか、なるべくこの街を離れずに問題を解決するための方法を教えてください」

大柄の烏人がくちばしを彼女の耳元に寄せ、小声で相談する。別に秘密をまもるためではない。これがバラッドの流儀。耳朵に

直接かかる人の息遣いを分析し、その人に相応しい行動を割り出すのだ。

答えがわかると、机の中から紙と筆を取り出し、さらさらと何やら書く。――バラッドは口を利くことができないのだ。

今、紙にはこう書かれていた。

『人に任せなさい。血の繋がる者にすべてを委ね、あなたは一切干渉してはいけません。月が一巡した時に改めて連絡をすると良いでしょう』

商人はその答えにやや啞然とする。しかし占い師の切って捨てるような態度に異論をはさむことはできず、彼女の評判を信じてその場を去った。

一人客が去り、また次の客が来る。路地裏を満たし、なお溢れる客の列。バラッドは一度腰を上げ、ぐるりと見渡す。

だがバラッドの視界は、多くのファンタジーエン人と異なりひどく霞んでいる。漆黒の眼を持つ彼女は目が不自由で、このような暗がりならまだしも、光のある場所ではまったく物を見ることができないのであった。

ここで稼いだ金銭で、もともとこの都の住民ではないバラッドは宿に長期滞在している。何故？ 問われれば、バラッドはとりあえず『声を取り戻すため医者を探している』とでも答えるだろう。しかし――もうすでにこの都にいるすべての医者、バラッドは顔を会わせている。

為すことも無く、漠然と何かを待つようにこの都、光の乏しい路地裏にいる。

バラッドは腰を下ろし、次の客を迎えた。

＊

一度彼女から目を放し、別の場所を見てみることにしよう。

大通りから垂直に枝分かれする小道の一つ。その先にある場所に、やや地味だが光の温かい噴水広場がある。

そこにも人々が押し掛けている。先ほどの少女占い師と同じくらいの人々は、そこにある何かに笑いと喝采を送っている。

人々の中心にあるもの、噴きだす水を切り宙を舞う、派手なオレンジ色の翅を生やした小さな道化。ピエロ服は目茶目茶な色彩で、逆さにポケットがついていたりとおかしな代物だ。

そのファンタジーエン人を、常笑いのシュラムツフェンという。道化蛾とも呼ばれる。救い子バスチアンの物語りによって生みだされた比較的新しい種族だ。

この道化蛾、しかしアマルガントの都が様変わりさせられた直接の原因である。かつて常泣虫のアツハライという種族だった彼らは、バスチアンによって生まれ変わるやすぐにこの都に自らが作り上げていた美しい銀細工を片っ端から破壊した。――自分達の愉悅のために。――さらにアツハライが消えたことにより、都を囲んでいた涙の湖も消えてしまったのだ。

アマルガント人は道化蛾に決して良い感情を抱いていないが、迫害することは銀翁ギルムートによって禁じられている。一方で、その与えられた芸の技は、関わりない者なら素直に、大いに笑うことのできる娯楽の一つだった。

しかし今この場にいる道化蛾は、アマルガントにいる唯一の道化蛾だ。他の道化蛾はこの都に飽きて違うところへ行ってしまった。――そもそも、道化蛾は単独では行動しない。彼はその点でもかなり異端な存在だった。

彼の名はオペレッタという。

オペレッタは笑いながら、華やかにアクロバットする。スピンタ

ーンに錐もみ飛行、翅を広げて手裏剣のように回転することもある。巧みなアクロバットが観客の注意を惹く。

そして、狙ったタイミングで失敗してみせる。噴水の柱に突っ込んだり、バランスを崩して水の中に落ちたり。そうして水に濡れ続けるおどけた彼の姿が笑いを誘い、人々は集まり続ける。

オペレッタは無償で芸をしているわけではなかった。とりおり噴水の端にぴょつこりと立ち、お代を請う。頂戴するのは銅や鋼の粒だが、観客の数が並ではないので結構な価値になるだろう。

この代を集めて、彼は遠くイスカールの町へ行くことを夢見ている。今はアマルガントの都の喧騒の中にいるオペレッタだが、その胸の裡では静かに暮らすことを願っている。彼が仲間たちと離れて一人いるのもそういった理由からだ。

ひとしきり銅の粒が噴水の中に投げ込まれると、また彼は飛び上り芸を始めようとする。

と、観客の輪を切って一人の男がオペレッタに迫った。

筋張った痩せた男で、目つきがきつい。剣を腰に下げていて、物々しい雰囲気を持っている。

「バラッドという占い師を探している。都の者に聞いたが見当たらず、君に聞けば分かると教えられた。――彼女はどこにいるか、教えてもらえるだろうか？」

場にそぐわない問いかけに聞こえるが、実はそうでもない。バラッドは時間を経つにつれて、気分が変わるにつれて、あちこちに不規則に移動しているのだ。その居場所をオペレッタは正確に予測できる。――変わり者同士波長が合うのだろうと、都の者たちは考えていた。

噂にたがわず、オペレッタは今来た男にバラッドの位置を教えた。男は愛想少なに感謝を述べ、その場を去った。

男の背中を見送りながら、オペレッタはバラッドのことを思う。

表現の乏しい彼女が、いま一人で何を感じているのだろうか、空しく想像する。

オペレッタとバラッドは、都の者達が知る以上に関わりが深い。二人は同じ旅をして、この都に来たのだから。

今の荒々しい雰囲気のもと、バラッドが会うことを考えると胸騒ぎがする。今日は早く切り上げて彼女と合流しようと、オペレッタは思った。

＊

日も傾き始め闇が濃くなり始めた。光の中で視力を失うバラッドの眼は、その暗がりの中で視力を強くしていく。

と、目の前の行列を押し分け、背の高い男がやってきた。剣を提げている――騎士だろうか――力持つ者にありがちな、力を誇る威圧感が伝わってくる。

人々が男に道を開けたのは、単に彼の気配に気圧されたわけではないようだった。

「あんた……粘りのヒドルンか」

並んでいたアマルガント人が彼を指して言った。その名前を聞いて、さらに何人かの人間が反応した。

「そうだ。すまないが順番を譲ってはもらえないだろうか？」

ヒドルンと呼ばれる男の言葉に皆は素直に従い、バラッドの前に騎士を通した。

一見ルールを破るような行為だったが、バラッドは特に何か思うことはなかった。料金は入るだろうから、順番は何でもいいのだ。銀の粒一つを代に置いた彼に、バラッドは聞きたいことを自分の耳に囁くように指示する。

「私はかつて、救い主バスチアン・バルタザール・ブックスに仕えた、そして今も彼に仕えている騎士だ。聞きたいことは一つ、行方不明になってしまった我が主の居場所だ」

難しい質問だった。探す物が動かない物ならともかく、意思を持つ者、しかもファンタージェン人ではなく、バラッドにとって未知に近い人の子の居場所なんて……。

だからバラッドは、あっさりと、わからないと答えた。――適切な答えを出して体裁を保つ気もなかったから。――それは彼女の潔さだが、目の前の男を相手にするには若干の不適切があった。

「分からないだと？ ふざけるな、評判の占い師だというからわざわざ搜したのだぞ……！」

ヒドルンは肩を小刻みに揺らしている。バラッドにはそんな細かい動きは見えないが、彼の怒気は分かった。

少しの間、両者は無言のまま向かい合っていた。

ヒドルンは何かしらの答えを欲していた。――その思い詰め方は、彼が騎士である故だろうか？

バラッドは己のこだわりを捨て、適当な答えをしてやろうかと思った。が、紙と筆に手を伸ばしたとき、彼女の中に別の思惑が生まれた。

『あなたはエルフェンバイン塔の戦いに参加しましたか？』

書かれたことを見て、ヒドルンは眉を寄せた。

「当たり前だ。私は救い主に一番近い騎士のひとりだぞ」

『私の父はその戦いに参加して、帰って来ませんでした』

つ、とバラッドが顔をあげ、ヒドルンと視線を絡める。漆黒の眼球、いかなる感情も覆い隠し見せようとしない少女の眼に、ヒドルンは寒気を感じた。

「——だからなんだ？ 私に復讐でもしようというのか？ ——果たし合いなら止めておけ。私は騎士だぞ」

勇むように、脅すように、ヒドルンは腰の剣に手をやる。

『あなたに復讐をする気はありません。質問に答えない理由を、父の仇だからとしても良いかと思ひまして』

鋭い騎士の視線を、漆黒の眼の少女は平然と受け止める。

逆にたじろぐのは騎士自身で、ヒドルンは気まずく顔を背けた。

「邪魔した——」バラッド！ そろそろ帰ろ？」

暇を告げようとしたヒドルンの声に、明朗な少年の声が、上空から重なった。

路地裏を囲む家並みの上から、オペレッタが降りてくる。彼の名を聞かなかったヒドルンは、さっきの道化蛾としか思わなかった。

降りてきたオペレッタは、さりげなく、バラッドとヒドルンの間で停止する。オレンジの翅がヒドルンの視界を遮り、紅いどんぐりお目目が彼をじっと見た。

「お客さん？」

オペレッタはさりげなく問う。

「まあ、そうね。——あの人、私の父の仇なのよ」

バラッドは唇だけを動かして答える。――二人の間では、それ
意思疎通ができる。

ヒドルンのことを仇と言いつつ、そこに微塵の感慨も見せない
バラッドだった。

「え……ええ!？」

「さ、帰りましょう」

折りたたみの机を抱えあげ、バラッドは移動を始めようとする。

彼女が唐突に帰るのはいつものことなので、待つ者達は素直に道を
あける。

「ま、待ってよ」

オペレッタがよたよたと追う。その翹がヒドルンの顔すれすれを
横切る。

バラッドの言ったことが引つかかるが、彼女が深く言及する様子
がないので、オペレッタはヒドルンの事を忘れることにした。

そして二人は去り、ヒドルンは取り残された。――彼は今のバラ
ッドの態度に大きな疑問を持った。父の死を平然と口にできる、そ
の冷淡な態度に。

二人の宿はアマルガントの都の外れのほうにある。地味な宿屋でアマルガント人ですら知らない者が多いが、かつて銀の都と呼ばれたころの遺産、常泣虫のアツハライが作った美しい銀細工を見ることのできる数少ない場所だ。

宿の中でも比較的上等な部屋を二人は取っている。そのためバラッドの日の稼ぎの大半は宿泊費に消えてしまう。だが食事も家具も良く、宿の者も応対が丁寧でバラッドは満足している。

宿の浴場で体を清めた後、バラッドが部屋に戻るとオペレッタがそわそわしながら待っていた。籐の椅子に座り、バラッドはオペレッタの方を見るが、オペレッタが何かを言い出す様子はなかった。このまま放っておこうかと考えたが、そのように意地悪することもないと思いなおし、訊ねた。

「何か気になることがあるの？」

オペレッタは気がつかなかった。――バラッドが声を出さないので“話す”からだ。

バラッドは少し苛ついた感じで椅子の肘かけを叩き、彼の注意を惹いた。

「昼間のこと？」とバラッド

「う……うん、そう。――バラッドがあの人のことを気にしてたみたいだから」

なおもそわそわするオペレッタに、バラッドはベッドの上に落ちて着くように示す。

「あれは、あの人が答えづらい質問をするから、わからないと言っても執拗だから、言ってみただけ。――私は父親が死んだことなん

て気にしていない」

「何で？ お父さんが殺されたかもしれないんでしょ？ 僕にはわからないけど——普通は仕返ししたくなるんじゃないの？」

「いいえ」バラッドの顔に表情はない。

「私の父親は物好きに戦争に行ったのよ。戦争で誰かに殺されたって、仕方のないことじゃない」

私は止めたのだけどね、と彼女は密かに思う。

「本当にそう思ってるの？ 悲しくないの？」

オペレッタは食い下がって尋ねる。

しかしバラッドが眉間にしわを寄せたので、視線をそらして会話を止めることにした。——時々、二人の間では似たような問答が行われることがある。それはいつも、このようにして終わっていたのだから、今回もいつもどおりではあった。

オペレッタは違う話をすることにした。

「そういえばさ……イスカールにはいつ行く？ そろそろ、ここにいるのも疲れたよ」

バラッドの眉尻が上がる。

遙か遠方、ファンタージェンの果てに近い霧の中に浮かぶ静かな集落、イスカール。話に聞くその場所は安らぎと静謐に満ち、一切の諍いも不安も、そして歓楽もない。死んでいるようだと、言う者だっている。

イスカールへ行こうと言うのはバラッドではなく、オペレッタだった。己が持つ、常笑いとしての性に疲弊したオペレッタは、いつまでも彼の芸を求めるような騒がしい物の一切ない、静かな場所に行きたいと願っている。今すぐにだって行きたいと思っている。

道化蛾はファンタージェン人の中でも丈夫な方なので、彼一人なら少し長く飛び続けるだけでイスカールでも、南のお告げ所でも行くことができる。しかし彼は今、バラッドといた。

バラッドにとっては、旅に目的地はなかった。声を取り戻す方法を探す、宛てのない旅だ。イスカールに行こうと提案されたとき、もしこのまま声が戻らないなら、それも良いと思ったが彼が望むようにまっすぐそこまで行くつもりはなかった。

だから彼女は言った。なるべくゆったりとした旅をしたいと。声を戻したいから、なるべく多くの街を回り、多くの医者に会いたい。そのために、金銭を稼げそうな街では長く滞在することも必要だと。利己的なバラッドの言い分。バラッドにとって、それを疎んでオペレッタが離れていくのは当然だと思って言っているのだが、しかしオペレッタは彼女の傍らに留まり続けている。それどころか、嫌いな自分を人前にさらしてバラッドと同様に金銭を稼ぐことさえしている。——オペレッタには、単純ならざるバラッドへの思いがあった。

が、それはまた後に述べることにしよう。とにかく今は、そんな風にオペレッタがバラッドに付き合っているのか、それとも逆なのか、ぐずぐずと旅路を進めている。

「そうね……………」

言葉が浮かばなかったので、彼女は口を動かすのをやめた。

「——まだ、ここにいたいのか？」

「ええ。……もう少しだけ」

場の空気が澱んできた。常笑いのオペレッタとしては、これほどうにかしたかった。

「そうだ、あれしようよ」

その言葉に、顔を背けていたバラッドはオペレッタに向きなおり、

そして立ち上がった。

部屋の隅に置いてある彼女の小さな荷物袋の中から、手の平に収まるくらいの革のケースを取り出した。ケースの中には、銀色の音叉が入っていた。

オペレッタは空中に浮かびあがる。

洋銀の棒で音叉を叩くと、澄んだ音が響き渡った。

「A——」

オペレッタが音叉の四百四十ヘルツの音に合わせて発声する。ボーイソプラノの彼の声は明朗で、曇りなく伸びる。

バラッドは小さくなりゆく純音に目を閉じて耳を澄ませる。

もう一度叩いた時、バラッドは口を開いた。

そこから出る音はない。だが、彼女は心で歌っていた。

バラッドは旅に出る前、故郷では歌い手になるべく修行していた。そのころは声も出ていて、目も普通だった。しかし声と視力、そして父親を失った時、彼女は故郷を捨てた。

けれども彼女は歌い手になることを諦めていない。声がいつか戻ることを願っている。——諦めかけているが、諦めていない。だから時々、こうして継るように音叉を鳴らし、空想の中で歌うような真似をする。

そんな哀れとも、ひたむきとも、オペレッタにとって形容しがたい彼女の姿を、旅路を共にした時からずっと見ていた。——そして今、オペレッタは彼女の雰囲気馴染みのない別な色が付いていることに気がつく。

その色は何なのか、少し考えた。迷いではない。揺らぎでもない。もっと単純な感情。ややして、判った。判って、彼は心を揺らした。

——悲しみ。

バラッドは悲しんでいる。多分、お父さんのこと。口では悲しくないって言っているけど、何だか、変だ。

悲しみの色を淡く滲ませた彼女の気配は、いつもよりも増してオペレッタの心を揺さぶる。――だが彼がそのことを言うことはなかった。――言ってはならない気がした。

判然としないまま、その日が終わった。

＊

次の日、いつもどおり二人は別れてそれぞれの場所へと向かった。いつもどおり、バラッドは足の赴くままに歩き、適当な日陰を見つけて折り畳みの机と椅子を設置する。そうして待っていると、間もなくして彼女に話を聞いてもらいたい者達が集まり始める。

二時間ほど占いを行い、日の位置が変わり日陰が狭くなってきた。そろそろ移動しようかと思い始めた時、昨日現れた痩せぎすの男、ヒドルンが現れた。

「昨日は少し無礼を働いてしまった。あの時、君に会う前に変な奴に絡まれて虫の居所が悪かったんだ。――言い訳だがな」

そう言うヒドルンは、確かに昨日よりは柔らかい雰囲気を持っていた。しかし、生真面目で気詰まりな雰囲気は相変わらずだ。

『何度来ても無駄ですよ。私にはあなたの質問、救い主の居場所を答えることはできません』

「そう……か……。弱ったな……」

バラッドのメモに、ヒドルンは苦い顔をした。

ヒドルンはバスチアンへの忠義で動いている。何者かに仕える騎

士にとって、その者は絶対であり、その者が如何なる過ちを犯そうと騎士がその者に捧げる忠義に変化はない。

理解できない、とバラッドは思う。

彼女は目の前の男から意識をそらし、周りの様子に注意を向ける。耳を澄ませば聞こえる、雑踏や談笑。鼻をくすぐる、様々な地方から届けられた不思議なおい。アマルガントの繁栄の気配。だが、これも銀翁ギルムートという優れた指導者があってこそ。救い主バスタンの軽率な行いで生み出された、道化蛾たちによって一度破壊されたこの都、そのまま衰退してもおかしくはなかった。

女王モンデンキントによって統べられているファンタージエンを支配しようとし、純白の美しきエルフェンバイン塔を血と炎の赤で汚した、浅はかな人の子。それがバスタアン。彼の引き起こした戦により、父親を含め多くの命が奪われた。そんな子供に、鍛え上げられた肉体と精神を持つ比類なき騎士ヒドルンは忠誠を誓っている。――バラッドには理解不能だった。

「君は何故旅をしているんだ？」

思考に耽っていたバラッドに、ヒドルンが問うた。

何故そんなことを聞く？ 正直、バラッドは不快に思ったが、ヒドルンが真面目な様子なので答えてやることにした。

『自分の声を取り戻すためです。――それが、私の「真の意志」ですから』

バラッドは筆談で答えた。

「真の意志？ それは……なんというか……大した言いようだな。重々しい。……そこまで君にとって声は大事か？」

『私は歌うことを欲します。失った声を取り戻し、自由に歌えるようになることを願います』

「歌、か。――君は誰のために歌う？」

誰のため？

直感的に、ある存在に思い当たる。だがそれを認めることは、彼女にとって今のところ、一番の禁忌だった。――ありえない、そうバラッドは思考を一蹴する。

バラッドは沈黙した。ヒドルンは別の問いかけを考えた。

「君は何処へ行く？　ずっとこの街にいるわけではないだろう」

これにもバラッドは答えない。イスカールという答えを口にするのは憚れた。

「行く宛がないのなら、エルフェンバイン塔へ行くと良い。あそこは……戦いのあった場所だから」

ヒドルンは、バラッドの父親のことを気にかけていた。昨日、彼女が自分のことを仇だと言ったこと。――わざわざ。――気にしていないと彼女は言ったが、それならあんな言葉が出てくるべくもない。

「君は、見たところ父君のために旅をしているわけではないようだ。だが、死んだ家族の弔いをしなくてもいいのか？」

『父が死んだのは、父の身勝手のためです。私が止めたにも拘らず、家を出たあの人はもう家族ではない。他人の死に、心動かすほど私はお人好しではありません』

突き放すかのような、冷たい返答。だがそこに、ヒドルンは裏腹な気持ちを感じずにはいられなかった。

不憫だと思う。これを招いた一因に自分がいると思うと、胸が苦しくなる。しかし、そう言っても彼女の機嫌を損ねるだけだろう。

「――不十分な弔いしか受けられないファンタージエン人は、“虚偽”として永劫に彷徨うという。そうなれば彼も哀れだろう。君が……家族である者でしか、彼にふさわしい弔いをすることはできないだろう」

不意にバラッドが立ちあがった。――ヒドルンから離れるつもりだった。何のつもりか知らないが、父親のことを蒸し返されるのは、彼女にとって何事にもかえがたい苦痛だ。

すばやく荷物をまとめ、光さす小さな広場の方へバラッドが歩く。これまでか、ヒドルンは諦め彼女の背を見送ろうとする。

と、広場に出たバラッドの目前にオペレッタがいた。

「あれ、バラッドだ。――僕？　僕はちょっと休憩しているだけだよ」

二人が顔を合わせたのはあくまでも偶然。

それを見ていたヒドルンは、これを最後の好機と、さりげなく二人の傍に姿を現した。

「！　昨日の人。――どうしてここに？」

オペレッタは警戒した。

「いや……なあ、君はエルフェンバイン塔へ行く気はないか？」

「どうして？　僕達はイスカールへ行くんだ」

「イスカールか。それは良い。――だが、家族の弔いをせずに自分だけ安穏と暮らすのはどうかと私は思う。そういう話を、さっきまでしていた」

ヒドルンが何を言いたいのか、オペレッタには掴みかねた。

だがその時、バラッドが問いかけるような視線を投げかけてきていることに気がついた。

「そう、だね。エルフェンバインはいいかも」

本当に？ バラッドが目線だけで話しかけてくる。

「うん。次に行く場所も決まってるじゃないし」

バラッドが首肯した。どうやら、ファンタージエンの中心であるエルフェンバイン塔へ行くことに決まったらしい。オペレッタとヒドルンは、それぞれ密かに満足した。

しかし彼女は父親のために行くのではなかった。――断じて。

エルフェンバイン塔には、そこに住まう女王のための医者が何人もいる。彼らは女王だけではなく訪れた者のことも看てくれる。――彼らなら、自分の声を取り戻してくれるのではないかと、たった今思いついただけだった。

だがオペレッタとヒドルンは、そんな彼女の思惑には気がつかなかった。そしてまた、バラッドも、エルフェンバインに行こうと決めた自身の心に、別の感情が混ざっていることに気がつかなかった。

＊

昼餉を済ませてから、バラッドとオペレッタは馬車を取り次の街を目指すことにした。わざわざ歩いて旅をする気は彼女にはない。都の門をくぐる時、バラッドはこの華やかな都を振り返る。

アマルガント、一度壊れて、再生した活発な都。救い主バステアンによって失ったものもあったが、得るものもあった。

見方を変えると、物語りを得たことによって美しい銀の美術を失

ったようにも見えるこの都。——何かを得れば、何かを失う。失って、別な物を得る。

だが、バラッドは失ったままだ。声も、視力も……父親も。

そして虚無から解放されたファンタージエン。バラッドの心には、まだ虚ろがある。

s l u g
| f i n.

「どうして君は『虚』に吸い込まれないの？」
問いに、バラッドはただ肩をすくめるしかなかった。



空が厚い雲に覆われていた。雨が降るわけではなく、重々しい灰黒の緞帳が何をするでもなく太陽を隠し、光を貧弱なものへとしていた。

きなくさい空だと、薄暗がりでぼんやりと見ることでできる世界の中、バラッドはそう感想を持った。

歩くのは右手に森を置いた街道。バラッドは一人きりで歩く。

誰もいない。それどころか生き物の気配、草木の気配すら、しん……としてしまっている。

悲鳴が聞こえた。

遠い――否、くぐもった小さい悲鳴。

そう離れたところではない。彼女の右手、すぐ見える木立に少し入ったところだろう。

見やると、『虚』があった。光も音も飲み込んだ、ぽっかりとした黒い空間。

『虚』とは、少し前までファンタージェンを脅かしていた『虚無』の残滓のようなものだ。虚無ほどの吸引力も拡大性もなく、近くに寄りさえしなければ無害で、いつか消えるような代物だったが、それでも捕まれば何人であろうと逃れることはできないもの。飲み込まれれば、むろん命の幕切れとなる。

視線を向ければ眼が痛くなるがらんだこの闇を、バラッドはじつと見る。普通のファンタジーエン人なら虚を透かして物を見ることなど不可能だが、特殊な眼を持つ彼女なら、一切の光が消える空間で物を見ることが出来る。

いる。必死に飲み込まれるまいと抗う何かが。

バラッドは少し悩んだが、助けてやることにした。――見殺しにする理由がないから。

しげみかき分け、木立の中に踏み入る。実体のない、ふわふわした虚を迂回しつつ、救命を求める者へと接近する。

道化蛾、正確には常笑いのアッハライと呼ばれるファンタジーエン人かと、バラッドは気づく。

ここには一人しかいない。何故？ アッハライは常に集団でいるはずだが。バラッドは訝しんだが、深く考えることは放棄した。少年と思しき彼の首をむんずとつかみ、そのまま引きずって虚の傍から離脱した。

木立を抜け街道の上に戻り、少年を投げ出す。しばらく少年は地面に転がったまま荒い息をしていた。

少年の風貌はいたってみすばらしいものとなっていた。虚に吸い込まれかけたからだろうか。ピエロの服は色が抜けてしまっている。目を白黒させている彼を、バラッドはしばらく観察していた。

「あの……もしかして助けてくれた人？」

少年らしい明朗な声で、彼が尋ねてきた。彼女は首を縦に振って答えた。

「ありがとう。でも――どうして君は虚に吸い込まれないの？ 虚のそばを歩いたよね？」

問いに、バラッドは肩を竦めるしかなかった。そんなこと、彼女自身にもわかりようがなかった。“あのとき”から、彼女は普通のファンタジーエン人と異にして虚に耐性を持ってしまったのだ。

「すごいなあ。かっこいいっ」

——かっこよくない。普通はありえない能力が、バラッドには疎ましい。

少年が元気そうなので、バラッドは立ち上がり先を急ぐことにした。

「待って」

呼び止められた。一瞬考えてから、バラッドは振り返る。

「ねえ、僕の話聞いてよ。その前に……ついてっていい？」

おずおずと、道化蛾という存在に相応しくない態度で、少年は問う。そんな特異な少年をしばし凝視した後、好きにきなさい、とバラッドは口を動かして——声は出さずに——言った。

バラッドは歩き出す。その背後に、少年が追隨した。



それから数か月、アマルガントの都に長期滞在した後、バラッドとオペレッタはタソクヌノビトの村を訪れていた。

タソクヌノビトは芋虫のような身体を持ったファンタージエン人。体長は一・五メートルほど。見た目、手足はなく地面を這って移動する。生まれながらにして身体が木綿に似た布で包まれており、それを脱ぎ捨てながら大きくなる種族。村は彼らの脱ぎ捨てた布で埋め尽くされており、目の不自由なバラッドなどはときどき足をひっかけて転びかけてしまう。

「——おっと」

また転びかけたバラッドを、オペレッタが支えた。

「大丈夫？ ……えっと、宿？ それならこっち」
無然としはじめたバラッドをオペレッタが誘導する。

——はじめの内、同行者ができるなんて面倒なことだと、バラッドは思っていた。

はじめて会った日、少年は常笑いのシユラムツフェンである自分が嫌になって、同じ種族の皆とも離れ一人で旅をしていると話した。旅の目的は、自分の生きている価値を見出すこと。もしくは世界の果てにある静かな町、イスカールに行って、たった一人で物静かに暮らすこと。

自分を疎んだ少年にとって、声と視力を失ってもなお気丈に生きるバラッドは、憧れの対象になるのに一日も必要なかった。しかしそんな感情を向けられたバラッドは、いよいよもって少年を疎ましく思った。

だが少年はバラッドに都合の良い能力を持っていた。読唇術だ。おまけに彼はバラッドの言うことに従順。眼が不自由でも優れた聴力と勘で何とか旅をしてきたバラッドだったが、自分の眼の代わりになるものがあれば便利なことには違いない。

少年も、自分からそう申し出た。バラッドの手助けをしたい、何でも言うこときく、だから一緒に旅をしてくれないかと。——少年は実のところ、一人でいることには耐えられなかったのだ。しかし誰かということも耐えられない。凜としたバラッドは、自分を常笑いとして見ない人だったから一緒にいたくなかった。

少年が離れる気配がないことを悟ったバラッドは、彼がついてくることを認めた。

彼には生まれもった名前がなかった。地底でひっそりと暮らしていた常泣虫には名前がなく、常笑いとなってそのままだったからだ。バラッドは少年に“オペレッタ”と名乗るように言った。

少年は——オペレッタは喜んだ。新しく得た名前で、バラッドの

傍で、新たな生き方を探したいと彼は言った。

左様ですか、としかバラッドは思わない。バラッドにとっては、彼は道具ぐらいにしか認識されていなかった。

以来、バラッドは何度となくオペレッタに助けられてきた。彼女から報いられることはなかったが、オペレッタはそんなことまるで気にしていなかった。バラッドがそこにいてくれるだけで、今の彼は満足だ。

宿屋の部屋は小ざっぱりとしていて、布で埋め尽くされていた外から見れば、思わず安堵の溜息がでるような場所だった。

寝具やカーテンなどの布は、織り込みで巧みな模様をあつらえられた、手触りも素晴らしいものだった。タソクヌノビトの伝統技術を用いて作りだされたもの。――見た目、布にくるまれているだけのタソクヌノビトだが、その裡に触手のように自在に動く糸と針を持ち、思いのほか細かい仕事までできるのだ。

やや手狭な部屋に二つ並べられたベッド。それにすんと腰掛け、やれやれとバラッドが息をついたのも束の間、オペレッタが思い切ったように口を開いた。

「ねえ、バラッドの話を聞かせてよ」

話、とはバラッドが旅に出た経緯のことだろうか。それに伴う彼女の心情。

今まで、彼女はそのような話をしようとはしなかった。オペレッタはそれとなく話してくれるように匂わせたことも二三度あったが、彼女が壁を作っているようで、特に聞く必要もないかと思ひ最近諦めていた。

しかし、今は状況が変わった。

バラッドの父親が果敢無くなった場所を、今目指している。それによるバラッドの微妙な変化。オペレッタは、これ以上聞かずにはいられなかった。

バラッドは拒絶したかった。もしオペレッタとの付き合いがもう少し浅かったならば、拒絶していた。だが今となっては、オペレッタのことを信頼していた——してしまっていた。オペレッタが求めるなら、面倒だがこれくらいのこと——そう、大したことではないのだ——応じてでも然るべきだと彼女は思った。

だから彼女は語り始める。前おきもなく、できるだけさげないように彼女の物語を。



ある朝、バラッドがいつもどおり起床し居間に降りると、顔を泣きはらした母親を見ることになった。

「あら……おはよう、バラッド。昨日はちゃんと眠れたかい？ 私は疲れているから、まだ食事を作る気も、食べる気にもなれないよ。すまないけど、食べたくなったらセレナーデのところに行っておくれ」

母親の声はしゃがれていた。本来は夏の穏やかな風のように響くメゾソプラノの持ち主なのに。

だがバラッドにも変調が訪れていた。——声が、出ないのだ。

「——……？」

口を開いても、自分と同じ名の祖母譲りのソプラノボイスが出てこなかった。

「おや………そうだね、あんたも泣いてたものね。私の前では何も言っていなかったけど、一人になったら声を出して泣いていたんだ

ね。――気にすることはないよ。当然のことよ。一緒に元に戻そう
ね」

母親は一人納得している。その眦から涙が零れた。

だが、バラッドは断乎として否定したかった。――悲しくなかつたから。確かに昨夜は涙がこぼれたが、声をあげて泣くに足りないことだったし、実際、彼女は無言で就寝した。こんなこと、起きるはずがない。

――あの父親が死んだことなんて、悲しくない。当然のことだ。

ともあれ、バラッドは何も表現しないことにした。黙って――声が出ないから黙るしかないが――母親に向かって頷き、衣服を改めたのち、家を出てセレナーデという母親の妹とその家族が住む家に向かった。

外に出ると、太陽の光が彼女を迎えた。きらめく朝の太陽は、地上に起きたことなどおかないなしに、健やかな光を放っていた。

それがバラッドが父親を亡くしたと知って迎えた初めての朝だった。

＊

叔母の家に入ると、予想通りの同情に迎えられた。それらに対しバラッドは無表情で応じ、従兄弟たちと混ざって食卓に並んだ。

向かいの席に叔父が座った。つまり叔母の夫。自身もまたエルフエンバインの戦いに加わった叔父は、義兄に――バラッドの父親に――守られて無事に帰ったと話す。君には済まないが、とても感謝している、と。そして、この恩に報いるために、バラッド達母子に

できる限りのことすると、彼は締めくくった。

何と答えば良い？ バラッドは自問する。父親の死のことをいつまでもほじくり返されなくなかったし、放っておいてほしかった。それよりも声が出ないことの方が重要。――バラッドは無言で頭を下げて感謝の意を示した。

二人の従兄弟は、声の出ないバラッドを奇異の目で見ていた。口に出して何かを言われることはないが、疎ましい。叔母の同情的な視線は煩わしい。叔父の申し訳そうな口振りは……腹立たしい。早く食事を終えて出て行きたかった。

夜は母親が作ってくれることを、バラッドは切に願う。

九時ほどになると、集落の一部に若い娘たちは集められる。平素の日課で、ハラビトの娘たちの発声集団訓練が行われるのだ。

ハラビト、というのは彼らが広野に住むことを伝統とするファンタージェン人という意味で呼称されている。元来はクサビトに近い種族で、男達は生まれて死ぬまではしてしない広原の中で酪農や狩猟を生業とする。女はというと、これは男女隔てなく狩猟をするクサビトと異なり、生まれもつ優れた発声能力を活かした遠距離伝令で、狩りを助けるといふ役割を担っていた。つまり、女達は頑強な身体を持たない代わりに、遙か彼方まで声を飛ばし、狩りをする男達の補助や、あるいは司令塔になるといった役目を持っているのだ。――また、女達の伝令能力は他の狩猟民族に借り出されることもあった。

だが、女達の活躍はそれだけではない。その声を使い、歌手や語り手などを目指す者もいる。実際、ハラビトの女の歌は力強く雄大で、高らかに響き渡る快いものとして人気が高い。――バラッドの祖母もそんな歌い手の一人。それもかなりの名声を得た女性だった。祖母はあまり長く生きなかったので彼女のことをあまりよく知らないが、バラッドはそんな祖母のような歌手を目指していた。

教官である大人の女たちの指揮の元、娘たちが声を合わせ響かせ始める。まずは皆で同じ声を出し、調子を合せる訓練だ。

バラッドはそれを見ているしかなかった。声が出ないのだから当然だ。ここにいる必要もなかったが、逃げ出すようで嫌だった。

のどを痛めて練習に参加しない娘は他にもいた。どの娘も、エルフェンバイン塔の戦いで父親やその他の家族を失った娘だ。

いまだに涙を流す、互いに慰めあう娘たち。歌う娘たちもそんな悲しい仲間に同情的。教官たちもまた優しい。だが、バラッドといえば、そんな思いやりを向けられるのは真っ平だった。

集団から少し離れ、一人冷静な眼差しで皆を見るバラッド。

そこに、一人の女が歩み寄ってきた。身の細い、背の高い女だ。

「――まさか、君がのどを潰すなんてね。君は感情に流されないたちかと思っていたが、そうでもなかったのかな？」

失望だ、と言わんばかりの女。バラッドは無表情な視線を返すばかりだ。

尊大な雰囲気この女は、名をエコーという。歌を歌わず、専ら男たちと狩りに行き、鷹のような声で伝令をすることでも有名。狩の最中に仲間が負傷したり死亡したりしても動揺せず、正確な指示を送り続ける、冷静で、冷徹な女。教育の場に立っても厳格なエコーは若い娘たちから敬遠されていたが、バラッドは抜きんでた能力を持つ彼女を一番の師として仰いでいた。またエコーも、優秀な才覚を見せるバラッドを密かに認めていた。

「しかし、今の君はとても平静に見えるね。涙は枯れ果てたということかい？　――眼は赤くなっていないね」

エコーの口調に情けはなく、また心の中にも同情はない。そんな非情さが、今のバラッドにはありがたくもあった。

何一つ反応を見せないバラッド。やがてエコーも彼女を放置して去って行った。

終日、バラッドはハラビトたちの生業を見て過ごした。

無為な一日。バラッドは誰に対しても、何も表現しなかった。

＊

それから数日が経とうと、バラッドの声が出るようになることはなかった。

母親は――彼女は二三日で復調したが――それが娘の父親への愛だと解釈した。

ハラビトたちもバラッドを非難したりはしなかった。が、かといってバラッドが無為な存在となり果ててしまったことに間違いなかった。どちらかといえば同年代の娘たちの中でも華奢な彼女は、男たちに混ざって狩りをするなど断じてできず、他の力仕事の効率もはかどらなかった。皆の洗濯の手伝いなどを積極的に行ったが、音声による意思疎通に大きく偏るハラビト達にとって、喋らないバラッドは扱いづらいものだった。

バラッドは混乱していた。当惑していた。もはや父親への未練など一欠片も無いはずなのに、何故声は出ないのだとバラッドは苛立たしく思い続けた。

彼女は歌いたかった。

歌うことはバラッドの誇りであり、喜びだった。今までバラッドは普通に笑いはしゃぐことのある娘だったが、次第に無愛想になり、皆と距離が生まれた。声を失ったバラッドを扱いかねたハラビト達は、その距離をあえて埋めようとしなかった。友人は少なからずいたが、彼女たちもやはり同様にバラッドどう接すればいいかわからず、距離ができるに任せてしまった。

日が経つほどに、バラッドは孤独になり、することも少なくなっ

ていった。それはブラッドをさらに追い詰め、混乱させたが、彼女にはどうしようもないことだった。

二週間が過ぎた。

ある日、暇を持て余していたバラッドは集落の外れにある巨木の梢に登り、どこまでも続いているかのような平野の地平線をただ眺めていた。

萌黄色の広野には、ところどころに動物や人がいる。歌っている女もいる。風にまぎれてラララと聞こえてくる女の高らかな歌声に、バラッドは胸の焼けるような思いを抱いた。――少し前までは、自分だってああして歌っていた。そうすれば、通りかかった者達が賛称してきたり、あるいは批評してきたりした。

誰にしても、歌っているバラッドに無関心ではいなかった。

なのに、今はどうだ？ ハラビット達はバラッドという存在を無視しようとしている。また声が出るようになれば元通りになるだろうが、このまま唾であり続けたら……。バラッドは自分の孤独で、惨めな未来を予想して苦悩した。

と、物思いに耽るバラッドを、下から呼ぶ者がいた。――エコー、あの教官の女だ。

呼ばれるままにバラッドが巨木を降りると、エコーは言葉少なくついてくるように指示した。何事かと当然思ったが、他にすることもないので、エコーの細長い背中の後ろについていくことにした。

やがてたどり着いたのは、平野の中にポコリと置かれた丘の、そこに口をあける洞窟の入り口だった。ハラビット達が『音響の洞穴』と呼ぶこの洞窟は、内部が五キロメートルぐらいの広がりを持ち、もちろん明かりがさしこむ場所はない。地下水で壁や天井が常にぬれていて、いつでも音が非常に反響するため、聴力を研ぎ澄ませて反響する音を頼りに明かりを持たずに洞穴を歩くといった訓練が極たまに行われる場所だった。しかし、それ以外に近寄る者は絶無だ。

エコーは当たり前のように洞穴に――明かりを持たずに――入ったので、バラッドもやはり続いた。

洞穴の中の闇は、顔先に手を持ってきても見えないくらいに深い。反響する洞穴の天井から滴る雫の音をソナーにして、エコーとバラッドは視力を使わずに歩いた。エコーはこのような行いに慣れきっていて、バラッドもまたエコーほどではないが落ち着いて歩いていた。

ほどなくして滑らかな岩に囲まれ休める場所に来ると、エコーは初めて明かりを取り出し、灯した。腰掛けるのにもってこいの出っ張りがあり、エコーはそこに腰かけるように言った。

ピッチのような洞々とした空間の中、赤いランプを挟んで少女と女は向き合った。

『耳は相変わらず優秀なようだね、バラッド。声が出ない生活は辛いかい?』

エコーは筆談を求めてきた。バラッドはそれに応じる。

『私達ハラビトは、声が無いことには始まらないようですね。私はここしばらくの間に、そのことを思い知らされました。』

声がない私は、まるで影を所有していないように扱われます』

エコーはにやりとした。

『その何事に対しても客観的なのは相変わらずだね。』

君に問おう。父親の死と声が出なくなったこと、どちらが残念かな?』

『声が出ないことです』

そう断じて書くバラッドに、ためらいは一切見られない。

『では、どうするかね。このまま声が出るまで待つのか。声が出るまで、何もできない阿呆のように過ごすのか』

非情な問いかけだった。バラッドは、答えられなかった。

『皆は君に同情的だ。声を失くして、君が何もしなくとも、誰かが君を迫害することはないだろう。ただそのかわり、君は誰からも話しかけられないし、接触されない。』

私は昔からそういった情け容赦を持つことができなくてね、このまま君が何もしないのなら、むしろ爪弾きのように扱った方が良いと思うのだよ。その方が、状況が鮮明になって誰彼にとっても良い。もちろん、私はそう思うだけで指一本動かす気はないよ。皆が思うままに任せる』

エコーの若葉色の双眸が冷たくバラッドを見つめる。その視線の奥に隠された真意を、バラッドは読み取ることができない。

バラッドはエコーを目線を合わせたまま逸らさなかった。意固地に、バラッドは師をにらみ続けた。

「君は、昔はもっと表情豊かな、普通の女の子だった。――そう、父親の大好きな、かわいらしい少女。だが今の君はどうかね。その死んだような瞳は何だ？　きっと今君が歌ったとしても、何の感動もあるまいよ」

（あなたに言われたくありません）

肉声で言われたことに、バラッドも口で返そうとして、声が出ないことを思い知った。

「勝気なのは相変わらずか。その勝気さゆえに、君を振りすてた父親を許せないのかな」

出る必要もない戦争に、わざわざ参加する父親。呼びとめたのに、

止まらず行ってしまった父親の背中。――そんな映像が瞼の裏に甦り、バラッドは振り払うように首を振った。

幻覚から立ち直ったとき、歌が響いていた。やや掠れたメゾソプラノの声が歌うのは、深く、昏く、哀しい子守唄。ささやかに紡がれるハーモニーは、黒い静寂の中に流れ、少し遅れて幽かな風となつて反ってくる。

エコーの歌。滅多に歌うことのない彼女が歌うのは、誰がためのレクイエムなのかと、バラッドは無言で問うた。

そして思う。悲しい歌など、聞きたくないと。

＊

歌い終わると、エコーは明かりを消して一人帰ってしまった。

暗黒の洞窟に一人取り残されるバラッド。――帰る分に問題は無い。

エコーの足音が聞こえなくなるまで待ち、バラッドは立ち上がった。

ぱた、ぱた、と獣皮のスニーカーで固い岩の上を歩く。足音が反響し、バラッドは反響の具合で周囲の状態を知る――はずだった。

返ってこない、音が。

音が何物かに食われている、そう気がついたとき、バラッドの胸に言いようのない虚しさがこみ上げた。

――『虚無』。

いや、違う。虚無は消えた。あのはた迷惑な救い主バスチアンによつて、虚無はなくなった。

だが、とバラッドは思い返す。聞いたことがある、虚無は消えたが、その弱い残滓のようなものが残っていると。それを、一部の者達が『虚』と呼んでいると。

虚無にしる虚にしる、触れてはならないことには変わらない。触

れば、身を取り込まれ無へと帰す。――虚偽となって、未来永劫ファンタジーエンの外の世界で彷徨い続けることになる。

虚は洞窟の奥の、深淵なる闇から生まれたようだった。弱い吸引力を感じるが、急いで逃げれば何事もなく済ませられる。

逃げる？

バラッドの自尊心が揺さぶられる。

だが、自分は逃げたことが無いのか？ バラッドは自問し、否、と答える。声が出なくなっただけで、結局バラッドは何もしなかった。皆に遠ざけられるまま、バラッドも遠ざかった。それを逃避と言わず、何と言うのか？

エコーの真意は解らないが、意図は解った。――動け、というところか。ぐずぐずしてないで、何かしろとエコーは言いたいのだろう。

バラッドは足を速める。虚から逃げるために。

逃げてやろう。だが、私はいつか声を奪還する。私は歌う。それが――私の欲することだから。

そうだ、それが私の『真の意思』。いつだって、私は歌っていたのだ。

出口までもう少し、と思ったときだった。ふいにバラッドの意識は闇へ、そこしれない空虚へと落ちて行った。

*

気がつくと、バラッドは洞穴の外にいた。丘だけがぼこりと盛り

上がり、それ以外は何も遮蔽物のない、だだっ広い野原に彼女は体裁なく転がっていた。月は雲に隠され、風がざわざわと落ち着きなく吹き抜けていた。

やけに明るいな、バラッドは思った。夜空は雲に覆われ黒灰となり、月明かりも星明かりもないのによく物が見える。

バラッドは立ち上がった。体中どこも痛いところはない。

集落に戻ると、もう皆家に入って、屋外を歩く者は一人もいなかった。音を立てずに歩き、バラッドは自分の家にたどりつく。

自宅は真っ暗だった。何も、見えない。母親はもう寝たのかと、今は何時だなどと自問しつつ、バラッドは明かりをつけることなく物の気配だけで自分の寝室まで行こうとした。

「バラッド、帰ったの？　――！　何だい、そのなりは？」

母親の声。暗闇の向こうから聞こえる。

何で真っ暗のままなの？　問いかけようにも、声が出ない。

「あんた……誰？　その格好……本当にバラッドなの……？」

母親の様子がおかしい。それに依然暗いまま。バラッドは気配のするほうに慎重に歩み寄った。

と、食卓に行き着いた。ランプが置いてあるのでバラッドはそれに手を伸ばした。

熱い！　バラッドがランプを取り落とすと、ランプはカランといって割れた。

するとバラッドの視界が戻った。薄暗いが、大体のものが見える。

「お母さんただいま。ごめんなさい、少し遅くなった？　今何時？」

バラッドは口を動かして尋ねた。――母親は、バラッドの唇の動きで何を言っているか分かってくれる。

だが食卓を前に座っている母親から返事はなかった。今度は逆に、

母親がバラッドを見ることができないようだった。母親の視線はバラッドの上で焦点を結んでいない。

「あんた何てことをしてくれるんだい……。火事になったらどうするんだ。ああ、真っ暗じゃないか」

真っ暗？ 確かに暗いけど、真っ暗なんてものじゃない。

でも仕方がない。バラッドは紙と筆を用意した後、替えのランプと火口箱を持ち出して明かりをつけようとした。

が、火口箱の火打ち石を打ち合わせた瞬間、バラッドの視界が明滅した。――火花を散らした瞬間。――まるで光があるとバラッドの視界が奪われるように。

火口箱のおが屑に火がついた時バラッドは確信した。――自分は光があると物を見ることができないのだと。自分にとって、闇は視界を奪うものではなく、闇がなければ物を見ることができないのだ。

『自分の声を取り戻すために旅に出立します。歌うことが、私の欲することだから。真の意志を、私は達成しにいきます。さようなら、お母さん。いつか戻ってくる時があるかもしれません』

母と別れることに、少しの躊躇もなかった。育てられた恩義があるから、じっくりと別れを告げたかったが、こうなったのなら仕方がない。こんな手紙を残すだけだ。

バラッドは闇の――彼女の視界が利くから今は闇だ――短い手紙を書き、母親の前に置いた。手紙を置き、火口箱は台所まで運んだ。――今明かりをつけられると困るから。

部屋に行き、獣皮のバッグに着替えを少し、小遣いをありったけ、紙を多少と筆を詰め、動物を解体することもできる料理用のナイフと傘を持った。

今に戻ると、母親が闇の中で手さぐりで歩いて明かりを灯そうと

努力していた。バラッドは、さようなら、と口ばかり動かして家を出た。

見送る者はもちろんいない。物寂しい旅立ち。

エコーの家の前を通った時、戸を叩いて行こうかと思ったが、止めた。エコーなら見送ってくれるだろうが、そうされる必要はなかった。

集落を出る時、名残り惜しさを感じることはなかった。生まれてからずっと過ごしてきた人たち、未練はない。もつと早くこうしていればよかったと、思いながら広野へと踏み出した。

とりあえず近くの町まで行こう。思うのは、それだけだった。



話し終えると、バラッドは宿の浴場に身体を清めに行った。あとにはぼつり、オペレッタが残された。

オペレッタはたった今まで語られていた彼女の話を考え直していた。

まず父親を失い、それから声をなくした。それによって虐められることはなかったけれども、彼女は孤立した。

『虚』にあったのは偶然。だけどその偶然が、結局彼女を旅立ちを不可避の物とした。――それさえなければ、誰かが、たとえば母親が、彼女を引き留めていたかもしれない。

語っている間の彼女は、まるで心を失くしてしまった人形のようなだった。同時に、ところどころで針のような鋭い感情が見え隠れしていた。

オペレッタの知っているバラッドは、大方無表情で淡白な少女だった。だがその希薄な表情も、彼女が内に抱える“虚しさ”によるもので、彼女は必死にその虚しさを埋めようとしている。――たと

えば、彼女が『真の意志』と呼ぶ、歌うことへの願いによって。――
――そうオペレッタは認識していた。

バラッドは歌えない。声が出ない。――どうして声が出ないのか？
彼女は分からないという。だけど、オペレッタには判った。判り切っていた。オペレッタがどう考えても、父親の死がショックで彼女は声が出なくなったとしか思えなかった。

オペレッタには悲しみがわからない。特に、理由のある悲しみがわからない。それは彼が常笑いのシユラムツフェンだからで、かつては常泣虫のアツハライだったから。彼は正当な悲しみを知ることができない。

けれどもオペレッタはバラッドの悲しみを感じる。彼女は認めないが、オペレッタは彼女の白い美貌に流れる架空の涙を見る。

どうにかしたいと思った。

彼女を救いたい。彼女のためなら、自分の何を捧げてもいい。

そう思った彼の想いは、まるで恋する者のそれに似ていたこと、オペレッタは気づかない。――――気付く必要もない。

p a s t | f i n .

特に語るべき大きなことはなく、アマルガントを出発して一月ほどの間に、バラッドとオペレッタはまっすぐエルフェンバイン塔へと進んだ。

明け方、車上で白い朝霧の中に浮かび上がる雪白のエルフェンバインを見る。バラッドは馬車を停めさせ、朝露の輝く草むらの上に降り立った。

雪のように妖しく光る象牙の塔を見上げた瞬間、塔から感じる荘厳なる気配にバラッドとオペレッタはそれぞれ戦いた。特にオペレッタの緊張は著しく、笑いを絶やさぬはずの顔が無表情になった。――おそらくファンタジーエン中の誰もが、学者でさえそのような光景を観察したことはないだろう。

バラッドといえば、実のところ、明るい中なのでエルフェンバイン塔が見えていなかった。しかし塔が放つ威圧感はひしひしと感じており、彼女は白いのっぺりとした顔にわずかにしわを作った。

しばし立ちすくんだ後、また馬車に乗り込みエルフェンバイン塔のより近い場所まで移動した。

降りるとすぐにバラッドは歩き出した。間近の塔から感じる迫力にオペレッタは身体がすくんで仕方がなかったが、バラッドが歩くので動かないわけにはいかなかった。

塔を包むように吹く風は朝霧を孕み、湿っぽくて冷たい。それは大気の嚙り泣きのようで、とても不快だった。

＊

塔の入り口までは一キロメートルほどある。少し歩いたところでバラッドは、父親の散った戦場は塔を挟んだ向こう側なのだと気付

いた。

バラッドの目的は、エルフェンバイン塔に住む医師たちに会って自分の声を取り戻す術を探すこと。父親の墓参りはあくまでもついでなので、今立っている地点からそのことを考えると億劫で仕方なかった。

というより、すべてが億劫に感じられるのが今のバラッドだった。まどろむような霧の中、バラッドの意識は眠気の波に揺られてぼんやりとしていた。

「あー」

滲んだような静謐を掻き乱そうとするように、オペレッタが陽気に発声した。

「なんかーじめじめだよ。翅が重くなっちゃって嫌だよ。ハネオモ、オモハネ、ハネムー、ハバネコ……」

一人で言葉遊びをするオペレッタの笑い声が空々しく響く。

バラッドは何も反応してやらなかった。それがオペレッタを致命的に気まづくさせ、笑いを止めさせた。

気詰り……オペレッタが思うのはそれだけだった。バラッドが黙っているのはいつもどおりで——というか彼女は喋れない——無表情なのもいつもどおり。だけどバラッドは表現が乏しいだけで、心の動きは普通の女の子ほどにある。オペレッタにはよく分かる。喜ぶときは呼吸が速くなるし、楽しんでる時は足取りが軽くなる。怒っている時は眉が立つし、不機嫌なら目つきが悪くなる。それらの変化は本当は微小なものだが、バラッドのことをいつでも心の一番に置いているオペレッタには、その程度の変化わかって当然だった。

そして今のバラッドはどうかといえば……沈んでいる、しばし考えた後にオペレッタはそう表現した。彼女が裡に抱える底知れない何かの中に、どっぷりと。それは息が詰まるような感じで、オペレ

ツタは彼女が苦しくないのかと思った。——この翅が彼女にあれば良いのと思った。

エルフェンバイン塔の周囲は生垣で作られた迷路苑で囲まれている。迷路苑といってもダイダロスが作ったラピュントスのような大したものではなく、あくまでも少しの戯れと鑑賞のために作られたものだ。

だがこの迷路苑は、荒らされても荒らされても瞬く間に再生するという不思議を持っている。それが象牙の塔に出入りする庭師の技なのか、はたまたこの迷路苑がもつ魔力なのか。今も、生垣には薔薇をはじめとした花が季節を知らずに咲き誇り、その香りは滴るようで、霧が晴れ始めた花曇りの空の下、眩暈を覚えさせるほどに匂っている。

「入る……んだよね？」

香りに意識を奪われ、迷路苑の入り口に身体を向けて立ちつくしていたバラッドに、オペレッタが尋ねた。

若干の忘我状態に入っていたバラッドは、オペレッタの声に動きを取り戻し、弱々しく頷く。そして深呼吸をした後、再び歩き出した。

ゆらゆらと歩くバラッドの後姿。朝露に長衣の裾を濡らしたバラッドの後姿は儂げな水仙のようで、見ているオペレッタは憂鬱だった。

だからこそオペレッタは、バラッドのすぐ後ろに付きいつでも手を差し伸べられるように心掛けている。

＊

迷路苑の通路は狭すぎず広すぎず、歩きながらいつでも花々に顔をよせられるくらいの道幅になっている。

もう霧はすっかりと晴れ、残された朝露が生垣の葉を湿らせ、緑の宝石のように可憐に輝かせている。曇り空の下の花の色はかえってビビッドになっていて、オペレッタはそれを大いに楽しんだ。バラッドも花の色は見えないが、香りに浸り少し気分を良くしているようだった。

ぽつり。ぽつり、雫が葉から葉へと落ちる音が響く。微かに虫が動く気配がし、蝶や蜂がおつとりと蜜や花粉を集めている。生気がある、バラッドは思った。瑞々しく、若々しく、ここには死んだ者の気配が全くない。——世界は死の上に生を積み重ねて存続しているというのに。——それがバラッドの哲学だった。

半時間ほど歩いたが、エルフェンバイン塔の白い壁が近づいてこなかった。おかしいとオペレッタが気付くバラッドの歩くコースを振り返ると、どうにも彼女は環状の迷路苑を横切るように、塔にまっすぐ向かわないように歩いているのだと気がついた。

その時、バラッドの鋭い聴覚はかすかな歌声を耳にしていた。柔らかなバリトンで、物悲しくて、乾いていて、バラッドの心と共鳴し、彼女はそれを追わずにはいられなかった。——今のバラッドの意識はほとんどそれに奪われていた。

そんなバラッドにオペレッタがついて行くと、そのうち彼はみずみずしい迷路に砂塵が認め始め、青々とした草木が黄緑になっていることに気付く。乾いた風が正面から吹いてきて、オペレッタのオレンジの翅をカサカサとくすぐった。

砂漠が近づいている。——漠然とオペレッタは思った。

オペレッタが歌を聞く。押さえられたテノールで歌われる陰気なブルース。思わず、何だろう、と彼の心も引きつけられるものがあり、バラッドはこれをずっと前から聞いていたのだろうか、オペレッタはようやく思い当った。

やがて辿り着くのは、砂に埋もれた噴水のある、小さな広場だっ

た。

砂漠の庭園。赤や黄色の小さな花が慎ましげに咲いている。サボテンのようなひそやかな拒絶が、その場に哀愁の如く漂っていた。――そして歌も、やはりここにある。

二足二手の青年が一人、砂の噴水の縁に腰かけていた。彼が歌っている。

その長身の青年は、全身が乾いた泥の色だった。目を惹くのは、両腕のあるべき位置に生えている大きな鳥型の翼。彫刻のようなデイトールで、羽毛が一本一本あるわけではない。しかしその凹凸は細密と精緻を極め、見ている者がはっと息を飲むほどの完成感がある。簡素なシャツとズボンに身を包んだ青年は、その美しき両翼をさもつまらなさそうにだらりと地面に降ろして歌っていた。

「サリュウデイジンかな……」

オペレッタが眩き、バラッドが首肯した。

サリュウデイジンとは、ファンタジーエンの砂漠地帯に住むわりと数の少ない種族。全身が細かい砂や粘土粒で構成されており、昼夜の寒暖差で生じる露を吸って固い泥のような身体を持つ。彼らは子供のうちは自在に身体の形を変えることができて、大人は身体の変形を止め、自分の一番望む形で一生を過ごす習性がある。

目の前の青年は、おそらくは大人のサリュウデイジンだろう。そうでなければ、あのような芸術的な翼を持つてはいないだろう。

バラッドが青年の前に歩み出た。青年は歌うのをやめ、バラッドをその眼に映す。

「……久しぶりの歌に、小鳥が一羽誘われてくれたようだね」

小鳥とよばれて、バラッドは微かに不快な顔をする。――まさか、私を小鳥と呼ぶ者がまだこの世にいるなんて。

「まあ座っておくれ。話を聞いてほしいんだ」

青年を不快に思ったバラッドだったが、先ほどまでずっと聞いていた、あのバリトンで歌う者のことはやはりもう少し知っておきたいと考えた。

バラッドは青年の求めのとおり、砂に埋もれた噴水の縁に、青年に並んで腰をおろした。二人が並ぶ光景は独特の雰囲気と美しさがあり、画家がこれを見たならきっと描きたくなるんじゃないかなとオペレッタは思った。

「僕はシヨロという。サリュウデザインだ」

青年は――シヨロは歌うように言った。

「小鳥、君の名は？」

シヨロはオペレッタを見ていない。オペレッタはわずかに自尊心を傷つけられたが、気にしないで空気のように振舞うことにした。

『私はハラビトのバラッド』

バラッドは紙に書いて名乗った。

「なんと！ 小鳥には声がないとは。いやはや……」

声がないと大げさに言われ、バラッドは不快感をはっきりと表情に見せる。――やはり、この男は鼻につく。――しかしシヨロの方にそれ以上の関心はないらしく、俄かに、自身にのめりこむように俯いて語り始めた。

「君が知っているか知らないかは判らないが、サリュウデイジンは自分の身体を定めることで大人とみなされる。自分で大人になると決意して変形すると、不思議と僕達は身体を変えることができる。――大人になる時期は人によって本当にバラバラなんだけだね。

僕はファンタージェン中を旅することを夢見て、翼ある二本足の姿になることにした。二本足以外の器官を持つことは、翼を中途半端にすると僕は思ったから、二本の腕は敢えて持たなかった。僕は本物の鳥に負けないくらい、それ以上の強く美しい翼を求めた。――強いことでは、吹雪にだろうが、風の四兄弟にだろうが負けることのない翼が欲しかった。美しいほどでは、白鳥のように雄々しく、誰もが振り返るような翼が欲しかった。

この翼を得るための変身には三日をかけた。まず骨から想像し始めた。強靱で軽い骨。構造は腕の手のそれを応用して、自在に、しなやかに動かせるもの。関節は液で潤し、靱帯で包む。靱帯は決して切れない。骨と筋肉を繋ぐのは腱で、これも絶対に断たれない。疲れを知らない赤い肉と瞬発力を生む白い肉を幾重にも重ね、美しい隆起を生むようにした。最後に皮を張り、羽毛を生やした。羽毛は寒さを防ぎ、水を弾き風を切って風をとらえる。

……そんな想像をした。もちろん僕らサリュウデイジンとは言え、砂で造形するには限りがあるから羽毛の一枚一枚なんて作ることはできない。だが変身の時の想像の深さで、作った身体の部分はいより良い機能を持つようになる。僕の翼も、僕が望んだとおり嵐にも竜巻にも負けない強さを持った。昼夜を問わず、一日でも疲れを知らず飛び続けることができた。

僕は翼はためかせ、三年間休みなくファンタージェンを旅した。充実した三年間だった。どこまでも続く広大な森林に行き、地鳴を

轟かせながら落ちる木の実を見てきた。遙か天空、雲の彼方まで高く積み上げられた、誰も住まない廃墟の塔を見てきた。深い山脈の中、真紅と紫黒がまじりあう油の湖を見てきた。天高くで吹く非常に速い風に乗り、幸いの竜と語り合ったこともあった。

そうして旅をして三年がたったある日、ふと僕は旅行記を書き終わった。――それまで僕は文学に関わりある物事一切をしたことがなかった。本は読んだが、他愛のない冒険ものばかりだった。その僕が、旅行記を書きたいといったら笑うかな？　でも安心してくれ、僕はこの通り――手がないんだ。――そのことに気がついたとき、僕は絶望を知った。僕は飛び続けるだけで、何も残すことができない。翼で風を切るだけで、想いをまとめることができない。あ……わかるかなこの想いが。わからないだろう。それも、これも、僕が文字を書くことができないからだ。

僕は女王陛下に謁見したくなった。ここに来たのは虚無の騒ぎが起こる前だった。翼に絶望した僕は歩いてこの迷路苑に入り……そのまま閉じ込められた。未だ陛下には謁見できていない。僕は……僕は……自分の絶望に閉じ込められたんだよ」

そして彼は問わず語りを終えた。

誰も口を開こうとしないので、オペレッタが問いかけることにする。

「ここから出ないの？」

「ああ……出ないのだ。どうせ陛下にお会いしても翼を手に取り変えてくれるわけではない。どこか別の場所に行っても、僕は絶望を知るだけだ。ならば、どこにもいかないほうが良い」

シヨロは立ち上がり、見事な翼を広げる。

「何かを得たら、何かを失う。しかし何かを失って、何かを得ることとは、ありえない。……それが、絶望。望みは叶えられるままに数を減らし、いつか絶望だけが残る。――バラッド君、君は何か欲す

るものがあるのかな？ この絶望しかない世界で」

バラッドはすぐには答えなかった。

彼女は苛々していた。上等な歌声が聞こえるからなんとなくここに来てみたが、得られたのは愚にもつかない問わず語り。さつさと先に行けばよかったと、バラッドは後悔していた。

バラッドは立ち上がり、シヨロの二三歩まえに対峙するように立った。近くにきたオペレッタに合図する。

「え？ 僕が通訳しろって？ 『あなたの絶望は関係ない』」

バラッドの口の動きを見て、オペレッタが代わって言う。

「『私は失われたものはダツカンする。何故なら、まだ何も得ていないから。私は声を取り戻し、歌い、ファンタージエン中のシヨウサンを集めるような歌い手になる。——それが私の真の意志だから』」

代理として宣言するオペレッタの口調は、バラッドの意思を反映したように断固としたものだった。——ところどころ難しい言葉の発音が怪しいのは別として。

シヨロは顔を抑え、笑った。

「あは……真の意志だって？ それは随分と大したものだ。だが、どうして君はそこまで歌うことに執着するのかな？ 心を殺したような小鳥が、どんな声で歌おうと言うんだい。——君が目を目を逸らし続けている悲しみに、君は向き合うことができるのかい？ ——ねえ、君は泣いているんだろう？」

「私は、泣いてなんかいない。——悲しんですらない」

怒気を滲ませるような口調——その口の動き。

だがシヨロはその内容を解さず、馬鹿にしたように言う。

「なんだって？ ごめん、僕には君の伝えたいことがわからない。
——君の悲しみしかわからない」

なおもバラッドは、自分の悲しみを否定しようとした。——が、術がない。オペレッタは怒りを表現することは不得手だし、バラッドは黙ってシヨロの言うことを聞いているしかなかった。

「ああ、君が声を取り戻せなくて絶望するのを見てみたいよ。それとも、その果てない悲しみ押しつぶされ、絶望に慟哭するのかな。
——それを見ることのできない、僕の絶望かな……」

身じろぎもせず、バラッドは聞く。——苦痛だ。だのになぜか足に根が生えたかのように、立ち去ることができない。

「僕が自分の絶望に閉じ込められたように、君の声も悲哀に閉じ込められているのではないのかい？ ——まったく、本当に可愛らしいよ、君は。本当に、君は小鳥だね。その黒々とした瞳も、すべてシヨロはシニカルに高笑いを続ける。乾ききった笑い声は、バラッドとオペレッタの胸に寒々しく響いた。

「バラッド」

オペレッタは背中から声かける。

「気にすること無いよ。……バラッドは何だって負けないし、声だつて取り戻すよ」

行こう、と彼が言い、ようやくバラッドは足を動かすことができる。

いつになくバラッドはオペレッタの存在を心強く感じた。バラッドは、彼に弱々しく微笑さえ見せる。

けれどオペレッタは、そこに彼女の綻びを見出した。早く——早く、何にも心を騒がせる物の無い場所に行きたい。そうすれば、悲しみだろうが、自己嫌悪だろうか、静かに胸の中に沈ませておけるのに。——彼が思うのはそればかりだった。

迷路苑を抜けるまで、シヨロの笑いはバラッドの耳を離れなかった。

＊

それから迷路苑を出るのは早かった。空は相変わらず白く不透明だった。そんな空の下で濡れたように光る象牙の塔の足元に二人は立った。

塔の地上部は、全周にわたりポーチとなっていて、ところどころに大きな両開きの扉がある。扉は燦然と輝くアラバスターで、ポーチの床は大理石。ヘレニズム様式の柱も大理石で、天井のアーチは銀の編み細工となっている。一周で二三キロメートルはあるのだろうかこのポーチのどこを見ても、一点の隙もない美しさと言ったら！ 今見ている範囲は外壁においてもほんの一部で、それに内部にもこれ以上の芸術があるに違いない。オペレッタは開いた口が閉まらず、目も眩んでふらふらと空を飛んでいた。

バラッドもまたこの美の結晶を目で見ることはできずとも、これらが奏でる妙なるハーモニーに耳を傾けていた。シヨロとの会話で胸に残っていた苦い味も、ずっと消えゆくような心持だった。

そこに、アラバスターの扉を開けて一人のイヌコビトが現れる。

真紅のフリルのついた服を着たイヌコビトは、二人の前で小さくお辞儀をして言った。

「あなた方は女王月の子陛下モンデンキントとの謁見を求めますかな？」

えっと……、とオペレッタは口ごもり、バラッドを見る。

バラッドは落ち着いた動作で紙と筆を取り出し、さらさらと返答を書いた。

「何々……『私は陛下ではなく、陛下にお仕えなさっている医師の方々をお伺いしたいのです』。……ははあ、象牙の塔に籠る学者達にですか。……ですが、ただいま女王陛下はお暇をお持ちになられていまして、謁見するなら今しかありませんぞ。——というわけで、こちらにお越しください」

そう言ってイヌコビトは二人に背を向けて歩き出す。どうやらこのままついて行けば、医者ではなく女王の前に立つことになることは間違いなさそうだった。

バラッドは苛立たしげにオペレッタを見た。その視線には、私は声が出ないからあなたが止めてきて、というメッセーじと、あなたはもしかして女王に会いたいのか？ という問いかけと、二つの意味が込められていたのをオペレッタは感じた。

「う……僕は……せっかくなら、女王様に会いたいかな」

そう、とバラッドは目を細め、イヌコビトの足音を追って歩きだした。

＊

塔の中もやはり美しい限りで、筆舌に尽くしがたいほどだった。オペレッタなど、時々その場に立ち止まって周囲の芸術を見ていたくなったが、案内のイヌコビトに立ち止まる気配がないので進まざるえなかった。

進んでいる中でオペレッタはあることを不思議に思った。塔の内壁に彫りこまれたレリーフが、限られた場所に彫られたそれなのに無限の広がりを感じさせることだった。これを彫った名匠たちのなせる技なのだろうか。壁のレリーフは静的でありながら動的、古めかしく見えて斬新、厳かでありながら華々しく、ファンタジーエンに存在する矛盾しあうすべての概念を包括する女王の権力を象徴しているようだった。

また、塔の中の美術品は美しいものばかりではなかった。中にはおどろおどろしい怪物の像や、狂った色彩をもつ水瓶なども置いてあった。だがそれらも――見事であることには違いなかった。

「虚無が消えてからというものの、陛下の下へ来る者もふつとりと絶えてしまった。どいつもこいつも、頼る時は他者を押しつけてまでここに来といて、用がなくなればそれきりじゃ。まったく、身勝手なものじゃ」

イヌコビトはそんなことを溢しながら歩いていった。聞いていたバラッドは、彼に賛同することもないなと思った。――それが人というものだろう、と。

その考えに引き摺られるように、バラッドは物思いに耽りはじめる。思うのは、先ほどの迷路苑での会話。――悲哀に声が閉じ込められている？ そんな訳、あるはずがない。――バラッドはぐじぐじとそんな風に物思いしていた。

どれくらい塔の中を歩いたのかはわからない。長かった気がするが、もくれん宮に続くつりとした階段を見たとき、ここまで大してかからなかったと感じた。階段もかなり昇ったはずだが、特段疲れを感じていなかった。

イヌコビトの案内はここまでだった。後は二人だけで進む。

曇り空の下のもくれん宮。バスチアンがモンデンキントと名付けた女王がいる宮は、大きな木蓮の花の形をしている。素材はわから

ないが、硬質で、しかし瑞々しい光沢を放っている。満月のときのみ開くというその木蓮は、今は当然閉じていて花卉のところに小さく入り口が開いていた。

もくれん宮に入る道はなだらかなスロープで、女王に会う資格のあるもの以外は滑って登れないという。バラッドがまず先に立ち、オペレッタも飛行をやめ肅々と登り始めた。

宮の中は——まるで雪が降り積もっているみたいだと、オペレッタは感想を持った。単に真綿で埋め尽くされているようだと言ってもいいが、綿のふわふわした感じは無い。白絹の布が張られた壁や天井の間に、光が源を見せずに溢れている。肌に感じる空気は、暖かではなく、かといって冷たくも無い。

漂う香気は木蓮に似たもの。ジャスミンの物にも似ている。高貴な甘い香りで、つつみこむ様な感じがある。

音の反響はくぐもった感じで、おごそかな雰囲気がある。

もくれん宮の白さは、バラッドの持つ白さと似ているようで違っていた。バラッドの白さはどこまでも空しい、漠たる白だったが、ここの白は無でありながら圧倒的な有で、名状しがたい。とらえどころのない、漠然とした神々しさの満ちる空間の中央に、少女の姿をした白い女王——モンデンキントがいた。

モンデンキントは花の天蓋付きのベッドの中に、いくつもの白いクッションに埋もれるようにして座っていた。十歳くらいの少女の身体は小さく華奢で、この世の白という白が濁って見えるほどの白い服でその身を包んでいた。

雪のような白い髪は長く、ベッドの中いっばいに流れている。決して乱れているわけではなく、一つ一つ筋が整って広げられているのだ。

瓜実形のとろけるばかりに白いかんばせに、ほんのりと紅い桜の唇。鼻は小さく慎ましげ、象牙色の長いまつげの下に輝く金の瞳は、アーモンド形で見える者の胸を締め付けるほどに愛らしい。——本当に、言葉にするのが空しいほど美しい女王だ。

優しげな、元気のある視線を女王がバラッドとオペレッタに向けて。どきりと胸を震わせたオペレッタは、知らず知らずに飛び上がってもじもじとした。

バラッドが落ち着き払った動作で一礼した。多少は緊張しているようだが、気圧されてはいない。――されまいと、根が勝気な彼女がしている。

オペレッタもどうにか口を開く。

「……は……はじめまして、オペレッタです」

それを聞いて、モンデンキントが花開くようにほほえむ。

「はじめまして、常笑いのシュラムツフェンのオペレッタ、ハラビトのバラッド。どうぞ、その椅子に座りなさい」

女王がふつくらとした手を上げると、唐突に椅子が二人の前に現れた。立ち尽くしていても仕方がないので、二人はマホガニーの椅子に身体を預ける。

「バラッド、あなたのおばあ様は本当に優れた歌い手でした。彼女にまみえることはありませんでしたが、満月の夜、星々の間に響き渡るような高く澄んだ歌声を私はもくれん宮から聞いたことがあります。一度お会いしたかったのですが、彼女から来ることはありませんでした。しかし孫であるあなたがここにいます。――会えてうれしいです、バラッド」

モンデンキントはまずバラッドに笑顔を向ける。その無垢な笑顔を半ば疎ましく感じたが、バラッドは小さく頭を下げて返答とした。「それと、オペレッタ。あなたにも――バスチアンの物語から生まれた道化蛾であるあなたにも、お会いできてうれしいです。――どうぞ、楽にしてください」

オペレッタはモンデンキントの歓迎にしどろもどろとなり、う、とか、あ、とかとしか口にすることができなかった。

「そう……あなた方二人は、どちらもバスチアンの行いによって旅に出ることになったのですよね。私がお話したいのはまさしくそのこと。——あなた方が思う、バスチアンとは何者ですか？」

「バスチアン……？」

オペレッタが言う。

「そう、例えばオペレッタ、あなたは彼の独善的な思考から語られた物語によって、それまでの常泣虫のアツハライとしての生活を失い、常笑いとして空しく彷徨うことになった。——バスチアンを恨んでいますか？」

問いかけるモンデンキントの表情は、依然、微笑のままだ。

オペレッタは視線を落とし、しばししてぼそぼそと言う。

「いや……恨んではないよ。確かにバスチアンが来なかったら良かったと思うこともあるけど、それはたまにで、なんていうか……僕らだって、こうなることを望んでしまったから……」

「でも、あなたのお仲間はどう思っていないようですが？」

「そうだね。でも……だから僕はみんなから離れたんだ。僕はバスチアンばかりを恨めない。僕は、僕自身が嫌い……だ」

オペレッタの言葉を聞いたバラッドが眉をひそめた。時々、彼が自分を嫌いだと聞くことはあったけれど、第三者に対しはつきりと言うのを聞くとまた心動かされるものがあつた。——オペレッタが哀れだった。

だが彼を哀れむ資格が、自分にはあるのだろうか？　そう自分を卑下するように思った時、ふいに迷路苑で会ったショーロの笑い声が甦った。

モンデンキントはオペレッタに是とも非とも言わず、バラッドに視線を向けた。

「では、バラッド、あなたはとうですか？　あなたはバスチアンがここで起こした戦によって、お父様を奪われていますね。――ああ、どうぞ、そのままでお答え下さい。私は声がなくてもあなたの言うことは分かりますから」

陰りの一切感じられない完璧な笑顔の女王。
バラッドは言われたとおり唇だけ動かして応じる。

「私は、父の死についてもう何も思うことはありません。だから、救い主に対しても思うところはあります」

「そうですか？　では、何故あなたは歌わないのです？　何故あなたは喋らないのです？」

「私は……何故かはわからないけど声が出ないのです。理由はそれだけです」

――本当かい？

ショーロの嘲笑う顔が甦る。――ああ嫌だ。何故あの男のことが逐一思い返されるのだろうか。

一層強く唇を引き結んだバラッドの様子に、モンデンキントはくすりと笑った。

「ではお聞かせ下さい。――あなたは今まで、誰のために歌っていたのです？」

「――！」

バラッドが硬直した。

ショーロの問いかけと、モンデンキントの問いかけが重なる。――見られたくない物を暴かれるような、不快な感じ。歯を食いしばり、込み上げるドロドロした感情にバラッドは耐える。

そんな彼女に、モンデンキントは冷静に問いを重ねた。

「誰のためです？ あなた自身のためではありませんよね？ いつも……いつもあなたの歌声は、生業のために出かけてしまう家族に届くように響いていた。そう、あなたの――」

ガタン！

バラッドが椅子を蹴って立ち上がった。

声が出るなら、大声を出して相手を制するところだった。――それ以上、余計な事を言うなど。――声が出ないから、バラッドはいつになく乱暴な振舞いをせざるえなかった。

そんなバラッドを、純白のベッドの中のモンデンキントは淡白に見上げる。

「……何か、あなたからお話ください」

「あなたは……あなたこそ、バスチアンの行いをどう思っているの？ 彼は確かにファンタージエンを虚無から救った。各地でいくつかの功績も残した。けれど過失もまた残した。このエルフェンバイン塔で繰り広げられた戦いだってそう。それら総てを考慮して、あなたは救い主をどう評価するの？」

くすりと女王は嗤う。

「そうですね……例えば、ここエルフェンバインの塔を血で汚したことなどは、まぎれもなく悪と呼べる行為でしょう。他にも、彼は善い行いしましたが過ちもまた多くしました。ですが――私はそれらの行為が、あるべきものではなかった、とは言いません。それらはこのファンタージエンの存続のために必要なものだったのです」

バラッドとオペレッタが、それぞれの驚嘆をこめて息をのんだ。

「善も悪も、このファンタージェンには等しく存在します。そして私も、ファンタージェンたる私もまた、善や悪、対立するすべての物を許容します。バスチアンの行い、そのすべてに意味があったと。――それが、あなた方ファンタージェン人と女王たる私の違うところ。あなた方はファンタージェンに生きながらファンタージェンではなく、全体のいくつかを否定し、人の子のように笑い、怒り、そして悲しむ」

「じゃあ……じゃあ、あなたはあの戦で沢山の命が失われたことが、有意義なものだったと言うの？」

「ええ、すべてに意味があると私は認めますから。あの沢山の命は失われただけではない――その失われた命に対して生じる、様々な人たちの様々な思いと、そして様々な物語がこのファンタージェンにとっての利益」

その言葉は冷たい。花のように可憐で、純白に身を沈める無垢な女王が語る言葉は、どんな合理主義者の言葉よりも冷たい。

バラッドは白い顔をすっかり青くしてモンデンキントを見下ろしていた。今にもモンデンキントに掴みかかりそうで、オペレッタはハラハラした。

そして、モンデンキントが微笑を消した。金の双眸が、バラッドを射竦める。

「――そして、あなたのお父様の命も」

「――！！！」

その瞬間、バラッドの仮面が崩れた。

小刻みに震えだしたバラッド。オペレッタは声を上げてモンデン

キントを制そうとしたが、声が出なかった。――身体が動かなかった。その時ほんの一瞬だけモンデンキントがオペレッタを見て、その眼に妖しい光が宿っていた。

――バラッド……！

横から見るバラッドの頬には、透明な涙の一しずくが流れていた。

「バラッド、あなたが悲しむのは当然です。あなたはファンタジーエンではないのですから。悲しみを受け止められなくて当然。しかし――どうして悲しみから目を逸らすのです？ あなたが目を逸らした悲しみはあなたの声を殺し、さらに空しさとなってあなたを苦しめているのに」

「私は――！」

「あなたが止めるのも聞かずにここで果てたお父様を恨みますか？ それとも、まだお父様に愛を向けますか？――あなたの欲することは何ですか？」

バラッドの口から嗚咽の音が漏れた。

漆黒の眼からは、悲しみに透きとおった宝石の涙が、次から次へと溢れていた。

バラッドはモンデンキントに背を向ける。彼女が振り向く際に、視線がオペレッタの上を一瞬通過する。それに宿っている、氷山のような悲しみの一角。オペレッタは胸が引き裂かれるような思いを噛み締めた。

バラッドの足音がトン、トン、トン、と聞こえ、そして消える。

――入ってきた場所から去ることなく、バラッドは忽然と姿を消した。

――悲しみに押し潰される君の姿が見たいよ。

シヨロ、彼のことをオペレッタは憎らしく思った。彼も、そし

て目の前の女王も、なぜ皆でよってかかってバラッドの悲しみを明かそうとするのか。

今すぐにバラッドの後を追いかけたかったが、身体は一ミリメートルだって動かない。声も出ない。すべて女王の魔力なのかと、オペレッタは物悲しい微笑を自分に向けるモンデンキントを見て思った。

「僕は……バラッドを泣かせなくなかった。バラッドに泣いて欲しくなかった」

ようやく、身体の自由を取り戻したオペレッタが言う。

モンデンキントは静かにうなずいて続きを待つ。

「バラッドが本当は悲しんでいることなんて、僕にだって、誰にだってわかった。でも、僕はバラッドが悲しむことを嫌がっているなら、それでいいと思った。そっとしておいて、いつかバラッドの悲しみがどこかに消えてしまえばいいと思ってた。——それで歌うことができなくなっても。——僕は間違っていたのかな？」

「オペレッタ、あなたは間違ってなどいません。絶対に正しいと言うことはできませんが、あなたのしたことは、選ばれて然るべき選択肢の一つです。——けれども、バラッドは歌うことを本当に望んでいた。それは真実に、彼女の真の意志でした。だから、私は彼女の悲しみを暴きました。あなたの身を束縛し、あなたの想いを無下にしてまでも、私は彼女の欲するところを成就させてやろうとしました。——例え、その先にどんな結末があろうとも」

モンデンキントは静かに息継ぎをし、また語りだした。

「バスチアンが過ちを犯したといえ、その責は私にもあります。

私が彼にアウリンを渡さなければ、彼は過ちも、悪いことは一切為さなかった。でも、善いことも一切為さなかったでしょう。――すべては、為されてみなければわからないのです。彼女が悲しみと直面することになっても、その次に何があるのかは今この時から見ている者にしかわからない。――だからこのアウリンには刻まれています。『汝が欲することをなせ』と。その先にある物語を引きずり出すために。

オペレッタ、あなたの”真の意志”は何ですか？」

「僕はバラッドの傍にいたい。バラッドを苦しめ悲しめるものに、バラッドが負けないように励ましてあげたい」

淀みなく宣言したオペレッタは、軽い動作で空中に舞い上がった。モンデンキントがもそもそとベッドから出てきた。小さな足で白い床の上に立ち、招き寄せたオペレッタの頭に触れた。

「正しき意志とあらんことを。そして、あなたの意志が挫けることがないよう――ファンタージエンの女王たる私が祈ってあげましょう」

オペレッタは感謝を述べなかった。

小さな紅い眼でモンデンキントの眼を覗き込み、そして身体を翻してバラッドの後を追った。

その小さな背中、明るいオレンジの翅に、不安や心配なんてものはほん少しもなかった。

●

白い空間にぽつりと残された白い女王。小さな体のモンデンキントは、オペレッタを見送った後、彼が座っていた椅子にすくと腰をおろした。

彼女は首にかけた金の鎖をたぐる。服の下から金のメダルが顔を見せる。——アウリンだ。

モンデンキント——そうバスチアンに名付けられた瞬間に彼に渡したメダル。これの力を使い、バスチアンは自身の記憶と故郷に帰る可能性をすり減らしながら、物語りという奇蹟を起こし旅をした。そして旅の果てに、際どいところではあったがバスチアンは帰った。だからアウリンはモンデンキントの元に返ってきた。

バスチアンはあと一步身を滅ぼし『もと帝王たちの都』へと行く状態にあった。しかし彼はそこから立ち直り、犯した過ちを振り捨て帰郷した。その心を傲慢に染めながら、心を洗い清めた。

モンデンキントはたった今までの会合を思い返す。悲しみにどうしようも無いくらいに心を蝕まれたバラッド。彼女もバスチアンも、負の感情に心を支配されていたことには変わらない。違いが生まれるとしたらこの先、負の状態から立ち直れるかどうかである。

バラッドは立ち上がれるのだろうか？ 親身に憂うわけではないが、モンデンキントは少しだけハラハラしてみる。

そして――モンデンキントは先刻自分が言ったことを思い返す。

「彼らはファンタージエン人。――では、私はファンタージエン人ではない」

誰に向けられるものでもない、モンデンキントだけの小さな疑問。女王の権威は絶対で、ファンタージエンのどんな恐ろしい生き物だって女王を信奉している。

誰も女王の権威を疑わない。誰も女王の存在を疑わない。

ファンタージエンがはじまった時から存在する女王。無垢で、慈悲深く、それでいてファンタージエンの存続のためなら如何なる行いも厭わない非情さを持つ者。――かつて虚無によって滅びかけたファンタージエンを延命させるために、古老に対面し物語の始まりと終わりを循環させてしまった時さえあった。

ファンタージエンを統べる、唯一の存在。どんなファンタージエン人とも似つかない者。女王とは何者か、それを問う者はない。過去にも未来にも――たった一つの例外を除いて。

これより遠く離れた時に――未来かもしれないが過去かもしれない――訪れた人の子がそれを問う。そのささやかな人の子の疑問が、ファンタージエンを想像を絶する形で揺るがすことになる。

けれどもそれはまた別の物語。いつかまた、別の場所で語ることにしよう。

オペレッタがもくれん宮をでると、そこはエルフェンバイン塔の地上部だった。

白いポーチより外は、天から降り注ぐ水で幕が掛かっているような状態。通常飛んで移動するオペレッタにとっては疎ましい限りだ。

——バラッドは？

ぐるりを見渡すと、水飛沫にけぶる景色の中、白い彼女が消え入るように歩いていった。

「バラッド！」

オペレッタは委細構わず雨の中に飛び出す。

しかし天上から射撃される機関銃のような雨に、彼は力なく地面に落ちてしまう。それでも彼は脆弱な手足を使って、豪雨という暴力の中バラッドを目指して這って進んだ。

「バラッド！ 待ってよバラッド！」

あらん限りの声で叫んで、ようやくバラッドを振り返らせることができた。

「僕も——僕も一緒に行くよ」

水で目が開かず、バラッドの顔を見ることはできない。だけど彼女に抱きかかえられた時、オペレッタは欬歔に震える彼女の胸を感じた。

とくとく、とくとく、鼓動を宿すバラッドの体は殊のほか冷たい。オペレッタは彼女への同情で胸が痛かった。

「僕も行くよ。バラッドを独りにしないから……寂しくさせないから」

バラッドはいったん引き返し、屋根のある場所にオペレッタを置く。そして自身はまた雨の中に身を置いた。

オペレッタは彼女の名を呼んで身を起こす。しかし濡れそぼった身体は重く、意志のままに動かない。

「バラッド……！」

垣間見た彼女の顔は悲哀に緩みきっていた。頬を濡らすのが雨なのか水なのかわからないけど、彼女の黒い眼はかつてないほどに情緒にあふれていて——その情緒とは無論悲しみであって——オペレッタは身体の想い部分を引き千切りたくなるほどの苦悩を覚えた。

「バラッドおー！」

炎の中から絶叫するがごとく、オペレッタは叫んだ。

しかし二人を遮る水の前にはそんな叫びも、空しい。

*

昔から雨は嫌いだった。雨が降ると外に出られなく、空の下で歌えない。雨は冷たいし、服も濡れる。

それに。ポツポツ、ポツポツと、雨だれの音は心の中に隠したものを叩いてくるような感じがする。どうして雨水ごときに誰にも見せない物を暴かれなければならないのか？ バラッドは半ば憎むように雨を嫌っていた。

小さい頃は、急に雨に降られるとうずくまって動けなくなることもあった。

そんな彼女を助けるのは、いったい誰だっただろう？

父親——お父さんだと、バラッドは思う。

彼は雨が降り出すと、家に彼女がいなければ必ず探しに出た。集落の外に広がる平原はとにかく広く、一体どこに彼女がいるかわか

ったものではない。だが彼は、いつもバラッドを見つけ出した。木の枝の下、岩の影、さもなければ草っぱらのど真中でしゃがみこんでいる彼女を見つけ出し、太い腕でよしよしと抱き上げるのだ。

——俺の小鳥は雨粒に打たれると動けなくなる。

バラッドが幼いころ、父はよくそう言っていた。別に嘲笑うわけではなく、むしろ自分の娘が可愛くて仕方がないといったふうに。そんな父をバラッドは心から愛していた。父に甘え、父も甘やかし続けた。

大きくなるにつれバラッドも自立の心を持ち始め、だんだん昔のように甘えなくなった。だけどいつも心の最上位には父がいた。

——あなたは誰のために歌うのですか？

モンデンキントはそう問うた。——わかりきったこと、バラッドはいっただって父のために歌っていた。離れていても声が届くよう、風に声を乗せて、蒼空の下で歌声を響かせた。そんな彼女の歌は、いつも幸福と愛情に満ち溢れていた。

だけど……その父もういない。今ただ、この雨が暴き立てる悲しみが胸にあるだけだ。

「お父さん……」

失った存在を、失ったはずの声で呼び続けている。打ちつくすような雨の中、バラッドはたった一人で。

再び通過する迷路苑は、濡れた花や果実がなまめかしく艶めいている。少し前の戦争では、ここも焼き払われたはずなのに、今はその名残すら見せない。まるで戦争など大したことではなかった、失われたものもさしたるものではなかったと言わんばかりに、迷路苑

の花々は息づいている。

みんな、破壊されたものは再生した。アマルガントもそうだ。――私だけが、まだ傷を癒せないで泣いている。

――すごいなあ、かつこいいつ。

オペレッタ――彼がどんなに自分の支えとなってくれたことか。溢れだしそうになる感情も、彼がいるから抑えられた。空しさで心が壊死していくような夜でも、彼の寝息が乗り越えさせてくれた。オペレッタには何の返礼もできなかった。彼の献身に一切報いることはできなかったけれど……もう、別れなければ。もう終わりにしなければ。

これから私は別のものになる。遠ざけ続けていた悲哀と同化して、そう、悲哀そのものとなるのだ。だから、笑顔であり続ける彼の傍にはいられない。

迷路苑から出ると、いよいよ戦場の中心、その跡だった。折れた剣や矢が残るそこはまだ草がところどころ生えている程度で、血のにおいが染み込んだ焦土が顔を見せている。――遠からぬうちにこも花に埋もれ、何でもない綺麗な場所となるのだろう。

光を見ることができない眼が、父の墓だけに光を見出した。

上つらの土を手で払えば、すぐに白い骨に触った。

見慣れない、人型の生き物の頭がい骨。誰のものなんてわかりべくもなく、だけど彼女はこの骨の主が誰かを悟る。――確信を持つて。

「お父さん……!」

ごぼり、と涙が溢れた。冷たい雨の中、温度のない父の骨を胸にかき抱けば、吐き気がするほどに嗚咽がこみ上げてきた。

「!——」

振り絞る叫び。

分かっていた、何故声が出ないかなんて。わかり切っていた、一切の発生を封じるほどに。

——声を出せば悲しい叫びが出てしまいうだった。

涙が出るのは悲しいからだではない。悔しかった。戦を出る父を、どうして止められなかったのか。どうして父は行ってしまったのか。——問うても、問うても、答えはない。泣いても、叫んでも、空しい声は水と一緒に流れていく。

「お父さん聞いてよ……!」

あなたの死はこんなにも悲しい。

あなたの不在はこんなにも苦しい。

あなたの沈黙はこんなにも切ない。

あなたを止められなかったことはこんなにも悔しい。

いつか親はいなくなるものだ。肉親の死をいつまでも引きずる自分を、バラッドは不甲斐なく思う。けれど——こんな別れ方でもよかった。こんな別れ方は酷い。大好きなお父さんだったのに、どうして……………。

「答えてよ。何か言ってよ——!」

何だっていい。声が聞きたい。石になった心をひきずってここまで来たから、大好きな歌も封じてここまで来たから——何か言ってほしい。

「……私は……誰のために歌えばいいの……………?」

あなたがいないのに。

いつもあなたのために歌っていたのに。

——悲しみに押し潰され、慟哭するのかな？

本当に、迷路苑であつたサリュウデイジンの言つた通りだ。もう、この悲哀から立ち直ることはできない。悲哀の深淵に閉じ込められ、もうどこにも行けない。……お父さん、あなたが小鳥と呼んだ娘はもう歌うことはできない。

やがて、バラッドはのろのろと立ちあがつた。父を——父の骨を胸に抱いたまま、涙か雨か、とにかくぐちよぐちよに濡れた顔で空を仰いだ。

「A——！」

それは突き抜けるような、突然のソプラノ。

豪雨の中の雷鳴、あるいは電光のごとく、耳を聳する雨音を切り裂いてバラッドの歌声が響き始めた。

＊

少年は歌を聞いた。

あらゆる音を打ちつくして、濡らして、流し去ってしまう重い雨の中、天使のような歌声が聞こえた。

——やっぱり、泣いているんだね。

オペレッタは胸の塞がる思いだった。そして今この瞬間に、バラッドの傍にいられない自分を呪った。

でも、迷いはしない。為すことは——為したいことは決まってい

るから。

今、行く。水に洗われた淀みない意識で思うことは、その一つだけだった。

今や滝のように激しい雨の中、バラッドは突き抜けるような高い声で歌っている。

ピアノで言えば右端ぎりぎりの高音域。ソプラノともいえない、超高声。

壊れたフルートを思わせないこともないが、それは間違いなく美しかった。限界を超えた声域で紡ぎだされる歌は、この世ならざる美妙の感動を持っていた。刃の上を渡る様に危うげで、切ない。歌詞はなく、妙なる旋律が波を打ち、矢のごとく声は放たれる。地に、風に、そして空に。――亡き父が昇った天へ投げつけるように。

バラッドの旋律に狂いはない。あるいは、その歌すべてにおいて狂っているのかもしれない。しかし詞のない歌に込められた煮えたぎる激情が、この歌を絶世の音楽として完成させるに至っていた。

――待ってよ、お父さん。どうして、どうして行っちゃうの？

過去の去来。何度も甦り、その度に振り払ってきたあの時の映像。

――どうせファンタジーエンの皇帝になんてなれっこない。ファンタジーエンから虚無を消した救い主だからって。

――放っておけば近いうちに彼は自滅するわ。誰も、何もしなくたっていい！

破っても破っても無くならない日記のように。その記憶は、苦みと悲しみと共に甦る。

――お父さん！

ようやく彼は振り向いた。でも、彼の微笑はもはや娘の届かぬ場所にある。

——バラッドの言う通りだ。けどな、俺は別に救い主を潰しに行くわけじゃないぜ。俺はあいつを叱りつけに行くんだ。

——知ってるか？ 救い主は、あいつはまだ子供なんだってよ。お前の好きなアトレューユと大して変わらない。そのガキがよ、友達も何も作らんでよ、高いところに登って王様ごっこしようって言うんだぜ。これをぶん殴んねえでどうすんだよ。

——でも、彼はお父さんの子供じゃない！ お父さんには関係ない。

父は止まらない。父の胸に燃える義の情熱は、動き始めてもう止まらない。

——死んじやうよ。

——良い子で待ってろよ、小鳥。帰ってきたら歌、聞かせろよ。

二度と父に歌を聞かせることはできなくなった。

バラッドの歌がさらなる高まりを見せる。透き通って、震えながら彼女のソプラノは駆け抜けていく。

こほ、と咳きこんだ。

吐き出した血が白い唇を赤く染める。——文字通り、血を吐くような歌。このまま歌えば確実に喉が潰れ、二度と声を出すこともままならなくなる。

けど……良い。それで良い。もう歌うべきこともないから。聞かせる人もいないのに、歌うことなんてない。

渦巻いていた。悲しみが、悔しさが、恋しさが、切なさが。張り裂けそうだった。心が、胸が、喉が、彼女の世界すべてが。歌うことは彼女のすべて。ならば、歌えなくなれば世界が終る。――終わらせてしまえ、こんな世界。この歌は、亡き父と、幕引きを決めた自身の世界への、鎮魂歌。あたかも最後の審判を前に奏でられる七人の御使いの喇叭のように、バラッドの歌は壮絶な美しさで響き渡る。

「A――！」

一層甲高いソプラノが弾けた。
その時――歌が止まった。

＊

雷に打たれるようだった。
彼女の歌が高まる度に、オペレッタはその感動に手足が震えた。
――なんて、なんて綺麗な歌。
だけど悲しすぎて、切なすぎる。――こんな歌が、この世にあっていいのだろうか？
そして血の滲むような思いで進み続けて、やっと……バラッドが見えた。
オペレッタは最後の力を振り絞って飛び込む。

＊

歌うために広げた腕の中に何かが飛び込んできた。
今まで一緒に旅してきた少年だと気がついた時、バラッドの反応

は早かった。

彼はバラッドに体当たりした後、力なく落下を始めた。しかしバラッドは彼が落ちる前に抱きとめる。

「オペレッタ……！」

少年の名前を呼んだとき、バラッドはまたせき込んで、口から血が出る。その温かな紅玉がオペレッタの顔に飛び、目の下を赤く染めた。

バラッドを見上げたオペレッタが、疲れたようにへらへらと笑う。

「バラッド……ちゃんと来たよ……。……君を、離したくなかったから」

触れあう二人は、お互いの身体を冷たく感じた。

肌を擦りつけるように身を寄せると、ほんのわずかな温もりが生まれる。

「——君を離したくなかった。だって、誰のためにも生きられない常笑いのシラムツフェン、その僕にとって、君は僕を必要としてくれる人だったから。君がいなくなったら、僕はまた一人で空しく笑い続けなきゃいけない。——ねえ、バラッド、行かないでよ。君がいなくなったら、僕はどうしたらいいんだ……」

利己的な告白。だけどバラッドには分かった。——それは彼の本心ではないと。

オペレッタにとってバラッドと一緒にいる理由なんて、ただ一緒にいたいから、それだけだ。でも、バラッドは違う。——旅のはじめの方は、違った。バラッドがオペレッタと一緒にいたのは、彼を眼の代わりと通訳に使うため。——バラッドは彼を利用するために、

彼と共にいた。

そんなバラッドにだから、オペレッタはあえて利己的な台詞を言った。今後もバラッドが彼を傍に置いて、後ろめたさを感じないように。

オペレッタの心からの優しさ。――バラッドの心に吹き荒れていた悲しみの風雨が瞬く間に鎮まっていく。

「――私の歌、どうだった？」

バラッドがほほえんで問いかける。――なんて可愛いんだと、オペレッタは思った。

「綺麗だったよ。あんなに綺麗な歌、僕は初めて聴いた。――僕はね、常泣虫のアッハライだったころ、アマルガントの歌い手たちの歌をたくさん聴いたんだ。アマルガントの美しさを支える僕たちへの、ほんのお礼として歌が捧げられたんだ。――でも、その歌のすべてより、バラッドの歌は綺麗だった。感動した。

でもね、あんなに悲しい歌、もう聞きたくないよ。だって、君の悲しみのこもった歌は、僕の胸を痛くするんだもん。だから――僕はバラッドの明るい歌が聴きたい」

「明るい歌――」

それは光明。

以前振り続ける雨の中で、その言葉とイメージは温もりであり、涙と水に濡れた心を乾かす軽風。

「I a……」

やにわオペレッタが歌いだす。

いつものボーイソプラノではなく、すこし抑えたカウンターテナー。あるいはアルトぐらいの声の高さで、バラッドを導くように歌う。

曲の調子は雨をまったく無視した朗らかで、伸びやかな感じ。弾むような歌い方はオペレッタらしく、バラッドは自然と心が躍りだすのを感じた。

「la——」

バラッドがソプラノを乗せはじめる。テヌートをかけた滑らかな歌い方で、オペレッタのリズムを包み込むように響かせる。

オペレッタがリズムを。

バラッドはハーモニーを。

そして二人の心がメロディーを奏でる。

今や雨の冷たさも、湿っぽさも、二人の世界には存在しなかった。そして二人の歌を聴く者があれば、その者もまた雨に打たれていることなど忘れるだろう。——それは本当に、妖精も踊るような陽気さ。風も乾かすような明朗さ。特別鋭い音でもなく、身軽にはじかれる歌声は、しかし奇跡のように雨の中でも大気を伝い、空と、心を震わせる。

次第に、幸福というものをバラッドは感じ始めた。——ああ、いつもそれは彼女の胸にあった。歌うときの彼女は、いつだって胸に幸福の鼓動を宿していた。

父への悲しみも今はすっかりおとなしくなり、水晶のようにバラッドの心の中で冷たく転がっている。この水晶は無くなることはないだろう。歌うときは悲しみの冷たさが喉を貫くかもしれない。

だけど——バラッドはオペレッタを抱きしめる。オペレッタは一瞬驚いたが、笑って彼女になされるままになった。

——私は、一人じゃない。悲しみの冷たさも、笑顔の温かさで解

かしてくれる人がある。

二人は歌い続けた。この重い雨が上がるまで。必ずおとずれる、
光が雲間から差す時を待ち焦がれて。

tender
|
fin.

epilogue

そのクサビトの少年は旅の途中で歌を聴いた。

今日も張り切って冒険に飛び込もうかという、一日の始まりの時。世界はまだ目覚め始めたばかりで、わずかに明るくなった空は紫を帯びて何とも言えない色合いを見せていた。

少年の聴いた歌声は水晶のように澄み切ったソプラノで、宝石のような美しさはいったん耳に届けば立ち止まり聞き惚れずにはいられないほどだった。儚げではないしっかりとした響きがあり、短調だが、心を優しく鼓舞するような感じがあった。——そう、まさしくこんな払暁のように。一目見れば暗い世界だけど、直に明るい時間が来る、そんな期待を抱かせる歌。

森の中、自分が何するつもりだったかも忘れて、少年は歌声の聴こえる方へ歩き出した。——足音を殺して。——まるで歌声で人を誘うセイレーンのようだ、少年は思った。

歌い手は、少女だった。白い髪、白い肌、来ている物も白い少女。その白さが一瞬異様に見えたが、少女が物柔らかな佇まいなのでそれほど心を揺らすものではなかった。——それに、誰かに似ていると、少年は思った。

少年は息を詰めて、まるで恋人を物陰から隠れ見るように、木の影に留まって少女の歌を聴いていた。

が、やがて少女は歌を止め、背後の少年に振り向いた。

少女の白眼も黒眼もない、漆黒の双眸に見つめられ、少年の鼓動が跳ね上がった。

「——」

少女が何か言った。しかし小声で聞き取れない。

彼女ははにかむように微笑し、それ以上少年に対し何のリアクシ

ヨンもしない。少年は気まずくもじもじした後、言う。

「綺麗な歌だね。思わず聞き惚れてしまったよ」

「ありがとう」

「っ——」

普通に話す少女の声もあまりにも美しく、少年は気恥ずかしくな
って思わず口を噤んだ。

眉毛も、睫毛も、綿で出来ているように白い顔の少女。唇には仄
かに紅を注している。——その特徴に、少年は一つのことを思い出
す。

「君……もしかして『鎮魂の歌姫』さん？」

「ふふ……そうね、そう呼ばれることもあるかな」

白百合のように少女はほほえむ。少年は今や顔を赤くしてどぎま
ぎしている。

『鎮魂の歌姫』——ファンタジーエンの一部で人気急上昇の歌い
手。鎮魂とは慰霊ではなく、荒ぶる感情を——魂を鎮めることをい
う。彼女の歌はまさしく、心の中で轟くどうしようもない感情の激
流を、夏のせせらぎの如く穏やかなものにしてしまうのだ。言うな
れば“ヒーリング・ソング”として彼女の人気はここ半年ほど急
な高まりを見せている。

少女の二つ名は、風信子石と名乗る吟遊詩人によって名付けられ
た。それはまだ三月ほど前の話なのでまだ広く知られてはいないが、
一年もすればファンタジーエン中にその名は広まる——彼女の信奉
者たちはそう言って憚らない。

「練習してたの？　なんか、朝一から有名人に会って練習を見られ
るなんて、今日はついているかもな」

「それはこちらこそ。――英雄アトレーユ、さん」

英雄、そう言われた少年はまた顔を赤くする。

彼女の言うとおり、少年こそファンタジーエンにおいて知らぬ者はいない存在。救い子の友であり、その友情の故にエルフェンバイン塔の戦いを引き起こした張本人。――様々な歌語りや本となって彼の物語は広く巷に広められている。

「ずっと、旅をしているんですってね、英雄さん。……どんな旅をしているの？」

「僕は今、友達との約束を果たすために旅をしているんだ。使命とか関係なしにね。――彼から連なる、すべての物語を終わらせるために」

「楽しいの？」

「ああ、楽しいさ。ずっと冒険の旅をすることができるんだ。毎日わくわくして仕方がない。約束をした友達はいなくなってしまったけど、別の友達と一緒に旅をしているしね」

その時、青銅の鐘を打ち鳴らすような“音”が響き渡った。静謐を鮮やかに叩く、力強く、壮麗な音。

「お、フッフルが呼んでいる。そろそろ行くよ。話せて楽しかった。――本当に、僕の友達の幸いの竜の歌より、君の歌は綺麗だったよ」

「ありがとう。さようなら。……アトレーユ」

言うやいなや、少年は風の如く走り去った。

間を置かずして、森の木立を揺るがして、白い大きな竜が空に舞い上がったのを少女は見た――感覚した。幸いの竜の美しい姿を少女は見る事ができないが、悠然とした気配を少女は確かに感じた。

「――――」

「オペレッタ、出てきてもいいよ」

木々の枝の影から、小さな姿が現れる。――道化蛾、オペレッタ。

「今のアトレーユ？ あ、救い主と一緒に旅してた？」

「そのとおりよ。……集落が隣り同士で、私とは幼なじみなの」

「へえ……でも、幼なじみ同士で話してた感じに見えなかったけど。

――向こう、気付いてなかったよね」

「うん、あの頃とは恰好も変化したしね。――まあ、いいかなあつて。楽しそうに旅してるみたいだし、幼なじみが出てきても邪魔なだけでしょ」

「いいの？ それで。バラッド、あの人と話している時すごく楽しそうだったけど。もしかして――」

バラッドはにこりと相好を崩し、それでオペレッタの言葉を遮る。オペレッタは苦笑いした後、空へと舞い上がる。そこで小唄を口ずさみ始めた。

そのボーイソプラノの歌を聴きながらバラッドは思う、――これでもいい、と。彼に乙女らしく心を寄せたのは、もう過ぎ去った時のこととなってしまった。それに、今は彼ではない、別の存在を私は愛おしいと思う。――それを口にするかもしれないけれど。

「そういえばあの人、救い主に関わる物語を終わらせるって言ってたよね。そんなことできるのかな？　なんか、いつまでも終わるそうにないんだけど」

「私もそう思う。でも、あの約束の本質は、アトレーユとバスチアンとの友情というところにあるんじゃないかしら。バスチアンと結

んだ約束だから、果たそうとする価値がアトレユーにはある。」“物語り”には終わりがあるけれど、“物語”ははてしない。――ま、アトレユーの場合、単なる物好きでやってるのかもしれないけど」

でもとにかく、彼は彼の物語を選んだ。――私は彼とは違う物語に生きている。

バラッドは歌いはじめる。黎明の光線が射しこみ始めた森の中で、肅々と、堂々と、彼女の歌を。はじまりは不安げな響きがあるが、直に勇み立つような調子となる。そこへオペレッタのデュエットが入り、意気軒昂の歌となる。

ひさかたの大気を震わせる、明るく、力強い二重唱。悲しみに染まったような黒雲にも、喜び勇む感じの西風にも、等しく歌は響いていく。

——— e n d e .

epilogue (後書き)

次回後書き。感想お待ちしております。

(あしがき)

バトルなしのファンタジーは初めてかも、とか思いながら書いていたらバトルどころか冒険も無い良く分からないものに。……期待していた方、すみません。

こんにちは、白亜逐舞です。いかがでしたでしょうか、私の物語るファンタージェンは。

初めて『はてしない物語』を読んだのは、確か中学二年生くらい。その時の感想は「バスチアンって屑だな」ということ。しかしエンデの小説自体は面白いなと思い、それから色んな彼の作品を求めて読みました。その果てに、もう一度『はてしない物語』を読んだ時は、ああ面白い、と感じた。——それが私とはてしない物語との簡単な関係です。

今回の小説の中にも書きましたが、バスチアンの過ちは誰彼にとっても重要なものであった、そのように私は解釈して、そこに面白さを見出しています。その過ちは彼自身にはもちろん、ファンタージェンにとっても必要だった。——しかし過ちという物は醜い物で、それをいともあっさり、鮮やかに表現したはてしない物語は、だからこそ面白いと思います。

『ファンタージェン』のシリーズは『愚者の王』が一番面白かったです。他の物は、あんまり原作から発展性のない感じもあって良くないかなと、個人的に思います。

さて、原作の話はこれくらいにして今度は私の小説の話を。

アイデアとしては、まず道化蛾を描いていきたいというのが一番でした。身勝手に不遇な運命にある彼らは何処へ行くのだろうか、私はとても気になっていました。今回はオペレッタというたった一人しか描いていませんが、彼らの全体もあのように誰かのために生きることができた良いのかなと、私は思いました。

バラッドは書きはじめる直前で思いつきました。まあ私好みの美

少女で、そこらへん結局自己満足から抜け出せなかったかなといった感じで。それと、どちらかというと音楽に興味が大きいので、歌姫。――全部私的な動機で作られていますね。

坪内逍遙の言ったことは正しい――こういう風に人物設定していると思います。オペレッタもバラッドも、結局私の一部を持っているのです。願わくば、二人が独自性を活かしていればよいのですが。内容としては、冒険がない上に、ミュージカルの如く歌いまくっているという、微妙なものになったかなあと。自己評価としてはかなり頑張りました。歌うのは好きです。始め想定していた構成も主題のためにすっきりさせて、とにかく二人の心の動きみたいのを際立たせるようにしてみました。それに加える形で、ファンタジーエンの様子とか、バスチアンの是非とか、女王の意味とか。――そう、女王は面白いです。本当に、今度ファンタジーエンの物語りをするときは女王を巡る冒険にしてみたいです。

あと、種族名がすべて片仮名になっている理由、それはハラビトに起因しています。ハラビト――原人――ゲンジン？ とか考えてしまい、面倒になったので片仮名です。原作からいる草人、あと多足布人と砂粒泥人の諸君、御免。

後書きはこれぐらいでいいですかね。だらだらしても仕方ないですし。

最後に個人的な予定を記しますと、これからは編入学試験の勉強のために小説はお休みにします。もしかしたら現実逃避して何か書くかもしれません。――期待される方……いませんね。

では、お読みくださってありがとうございました。感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7527f/>

ファンタージェン ～鎮魂の歌姫～

2010年10月10日18時17分発行